

# CAMINOS-8 (*michi* : 道)

(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*

Bernardo Villasan\*<sup>\*</sup>

## ÍNDICE GENERAL

### 1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その二)

#### CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

### 2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasan.

---

\* **Aiko Arai.** Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* **Bernardo Villasan.** Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

## 1.「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その二)

### CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

10) 第 10 日目 ティエラ・デル・フエゴ州の州都、ウシュアイアで氷河や  
透明な蒼い湖などの風景に驚嘆する アルゼンチン  
2月8日(土)

#### 1) ウシュアイア (Ushuaia) 港

鏡のように透き通った海面に山影を映しているウシュアイアの港に船が停泊したのは、早朝、6時ごろであった。とうとう、ブエノスアイレスから3250km、南極圏までわずか1250km足らずの、南極にもっとも近い<世界最南端の都市>に到着したのである。港には、<USHUAIA, fin del mundo—世界の最果て>という看板が建てられていた。三角形の山は、オリビア山(1331メートル)であろうか。一連の山々の中にすっきりと立つ姿は優美である。後ろには、うっすらと金や桃いろ、薄紫、薄緑が蒼い空に広がりは始めている。日が明けるまではぎまの時間が刻々と移ろうたびに、空や海の色彩が変化していく様子は、何とも言えない美しさである。下船したのは、すっかり、明るくなってからである。少し、ひんやりした凜とした空気に包まれ、心地よかった。

今、下り立ったこの大地は、先に述べたように、1520年マゼランが世界一周航海の途中で発見した島である。島に多数のたき火を見つけて<ティエラ・デル・フエゴ—火の島>と名づけた。当時、半裸の生活を送っていた、いわ

ゆるフエゴ島民と総称されるヤーガン、オナ、アラカルフなど3部族が住んでいた。彼らの間では<オニシンーオナ族の地>と呼ばれていた。彼らが暖をとるために燃やしていた火とも、マゼラン艦隊を見て、だした警報の火とも言われている。フエゴ島には、大小数百の島があり、総面積は九州よりひと回り大きい。西半分はチリ領、東半分はアルゼンチン領である。3部族は、採集狩猟民である。ヤーガンとアラカルフは、海岸部に居住し、海藻、貝類、魚類、海獣に依存していた。樹皮性のカヌーを利用していたので、カヌー・インディオとも呼ばれる。移動性の高い生活をしていた彼らが、先記したフォークランド島をカヌーで訪れ、居住していたという説もうなずける。一方、オナは、内陸部に居住し、グアナコ（ラクダ科動物）をはじめ動物の狩猟が主になっていた。領有する一定地域内で獲物を求めての移動生活をしていた。

ヤーガン族が<湾の終わり>と呼んだ、広い湾内の内側にあるウシュアイアは、州都でアルゼンチンに属する。

## 2) ティエラ・デル・フエゴ国立公園

ティエラ・デル・フエゴ国立公園内を走るレトロな蒸気機関車（南フエゴ鉄道—El Ferrocarril Austral Fueguino）に乗車するために、バスが、ウシュアイア駅に向かって出発した。透明な淡いブルーの空の下、険しい山並みを連ねてマルティアル氷河がウシュアイアの町の背後にくっきりと雄大にそびえ立っていた。夏だというのに、山頂のところどころは雪に覆われていた。最高峰でも標高1450mと、そう高くはない山々だが、南緯55度のウシュアイアでは、氷河を形成する。冬は一面、雪におおわれ、スキー場となる。チリとアルゼンチンの境を走るアンデス山脈に太平洋からの湿った風がぶつかって山々に雪を降らせて、氷河となる。19世紀末に、この地を訪れたフランス人探検家にちなんでマルティアル氷河と命名された。山脈の手前に軒を連ねている色とりど

りの屋根がついた家々は、シンプルな建築でこじんまりしていた。町を抜けると、空とほとんど同じ色の薄いブルーのビーグル水道に沿ってバスは、しばらく進んで行く。ビーグル水道は、東の大西洋と西の太平洋をつなぐ水路で、アルゼンチンとチリの国境でもある。大西洋から太平洋まではおよそ、320kmある。この辺りを流れているビーグル水道の幅は、10kmもあるらしく、水が流れているのがほとんど分らないくらいゆったりしている。水路の向こう側には、セーローCerro一丘、小山一が連なっている。こちら側は、水路に沿って濃い緑の樹木が植えられて、緑と青色のコントラストが光の中で輝いて目を奪われる美しさである。空気がいよいよ透明で蒼く、壮観な風景がずっと車窓に眺められて、目が離せなくなってしまう。

ちなみに、ビーグルという名前は、進化論のチャールズ・ダーウィン<Charles Darwin-1809-1882 年>が乗っていたことで知られるビーグル号からきている。ダーウィンは、ビーグル号での航海中（1831-36 年）、南半球各地の地質、動植物を観察した。のち、進化論の古典となった<種の起源>を1859 年出版した。

先記したように、フエゴ島民に初めて接したヨーロッパ人はマゼランであったが、およそ、300 年後に、ダーウィンは、フエゴ島民に出会ったことになる。19 世紀初めまで、ここを訪れたヨーロッパ人はまれであったが、ダーウィンはそのうちのひとりであった。1880 年以降になると、ヨーロッパ人の入植者が増加して、先住民人口は、激減した。

ビーグル水道が大きい山々に隠れてしまって間もなく、南フエゴ鉄道駅に着いた。すなわち、ここ、世界の果てにあるウシュアイア駅とティエラ・デル・フエゴ国立公園内にある国立公園駅を結ぶ鉄道である。レトロな蒸気機関車は、<世界の果て号>と、ロマンを誘う名で呼ばれている観光列車である。ゆっくりと1 時間ぐらい乗車して公園内を見学できる。面積は630 平方 km(東



京都の3分の1くらい)と、かなり広い。

この鉄道がはじめて敷設されたのは、1910年で、ウシュアイアにある監獄のために使う薪を森から運ぶためであった。当時は、監獄を起点として森の奥の作業地まで、全25kmの路線であったが、後に廃線となった。1994年に末端のわずか7kmが残されて、現在、走っている観光用の列車路線となった。駅構内には、当時の作業にあたった囚人の記した言葉が、写真とともに壁に貼られていた、<.....雨風や雪があろうとも、早朝3時には、すなわち、(軍人が)隊形を整える2時間前には、シャベルとツルハシで全線路から障害物を取り除いていった。その後、囚人たちは、パンなしの一杯のブラックコーヒーをもらいに行った。昼にパンを食べる時に、休憩した。また、6時に戻ってから、パンが配られた。(Amoldo Canclini, 鉄格子の後ろで)>、<ほとんど、毎夏、囚人が脱走したが、いつも失敗に終わった。時々は、逃亡と捜索がある期間続くこともあった。そういう時は、一度ならず、監視の射撃で血が流されておしまいとなった。山にかりだされるのを囚人たちは、喜んだ。新鮮な空気を吸いこみ、体力を回復した。ある者は、樹木を倒し、他の者は、2mの長さに切断していった。.....(同上)>。

赤く塗られた機関車がゴトン、ゴトンと南極ブナの林の中を走っていく。蒸気機関車に乗ったのはいつ頃だったか、思いだせない。車窓の左側を流れるピボ川は、銀いろに輝いている。南極にいるとは思えない暑さである。ブナの林の向こうには、雪を被っていない三角形のコロラド山が、こちらに迫ってくるように凜と立っている。冬には氷河で覆われるであろう山頂がむき出しになっている。途中で<ビュウ ポイント、マカレナの滝>と立てられた標識がでているマカレナ駅で下りた。灼熱の太陽が澄みきった雲ひとつない真上から降りそそいでくる。新鮮な乾いた風が気持ちがいい。先の囚人の言葉どおり、ふつつとエネルギーが沸いてくるような気分になってくる。夏のせいだろうか、

あまり水流のない滝ではあったが、心身ともに爽やかになった。ふたたび、車両に乗りこむ。しばらくしてから、緑の平原に無数の切り株が、点々と広範囲に散らばっている場所をとおり過ぎていく。ブナの林があったところである。先の囚人たちが樹木を伐採した跡地である。冬には、雪がかなり積もったため、切り株の背が高い。冬の伐採は非常に辛く、全身凍りついてしまい、はやく、監房に戻りたいと切望していた、という先の囚人の文章がよみがえった。

やっと、ビーグル水道の一部であるエンセナーダ湾に下り立った。公園内で、いちばん美しい場所である。浜辺には標識が出ていた。目の前の小島の名前をおしえてくれる。特に、魅了されるのは、島の後ろにそびえ立つ雪を被った山々である。＜Ensenada Zaratiegui, Parque Nacional Tierra del Fuego—サラティエギ エンセナーダ湾、ティエラ・デル・フエゴ国立公園＞、レドンダ島、オステ島(チリ)、トラペシオ山(台形の山)、レドンド山(円い山)、クチージョ山(尖がった山)など、山の名前に、山の姿がそのままつけてあるので分かり易い。ビーグル水道は、先記したように、アルゼンチンとチリの国境にもなっている。目の前の地図には、ひと目でわかるように国境線が引かれている。それによると、向こう側のチリ領には、遠方に長く横たわっているのが、オステ島 (Isla Hoste)、ナバリノー島 (Isla Navarino—チリの海軍基地で有名な島) などである。こちら側のアルゼンチン領には、ウシュアイア、現在いるティエラ・デル・フエゴ州のエンセナーダ湾、これから訪れるロカ湖などが記されている。あらゆる国からやって来る観光客を考慮したていねいな地図で、ありがたかった。

エンセナーダ湾は吸いこまれそうな青々とした水を湛えていた。それよりもっと鮮烈なからーんとした邪魔者が何ひとついないどこまでも届きそうな碧い空が上に広がっている。そして、中間には、先ほどの氷河を頂いた山々が

神々しく横たわっている。

同じ浜辺にあるグアラニ埠頭< MUELLE “A.R.A.GUARANI” >には、小さな世界の最果て郵便局がある。外の標識には<ウシュアイアからブエノスアイレスまで 3040、南極 3945、南極大陸 1200km、アラスカ 17.850km、パリ 13.300km、マドリッド 12.200km、ニューヨーク 10.600km.....>など、ウシュアイアから世界中の主要な都市への距離が記されていた。残念だが、PEKIN 18.323km はあったが、TOKIO がなかったのは、まだ、あまり日本人はここまで来ていないということだろうか。

中に入ると、久しぶりにチェに出会うことができた。懐かしかった。まだ、アルゼンチンでは、チェが国を代表する顔であることを知り、嬉しかった。半世紀以上も前になくなっているのに、過去の人ではないのだ。ここを訪れる世界中の観光客にいまだに人気があると思われるのだ。額縁に入った大きな写真のチェは、トレードマークの葉巻を手に持ち、ベレー帽を被っている。<CHE>という赤い大文字が写真の下に書かれている。そのすぐ下には、チェ・ゲバラの有名な言葉<敗退する闘争というのは、放棄する闘争だ.....世界の果て、アルゼンチン>が掲げられている。その言葉の下には、さらに3枚の写真が飾られている。<Che>という文字の入ったチェの赤と黒のイラストの写真は、かなり目立つ。また、銃を手にした男たち、女たちのキューバ革命さなかであろうと思われる黒白の写真もある。とてもおかしな郵便局だ。チェの思想が詰まった郵便局とは.....アルゼンチンの別の顔を見たような気がした。それとも、アルゼンチン人は、いまだに、39歳で外国で処刑されたチェに対する愛惜の情でいっぱいなのだろうか。

エンセナーダ湾から始まる海岸線の道<Senda Costera- センダ・コステラ>は、ビーグル水道を見ながら進んで行く森の中の道である。移入されたウサギやビーバーが、今では繁殖してここに、生息している。

十数キロほどの道を辿って着いたのが、ラパタイア湾で、ここにも地名を記した標識が立っていた。＜ティエラ・デル・フエゴ国立公園、ラパタイア湾、アルゼンチン共和国、国道ルート3号終点地、ブエノスアイレスから3063km、アラスカまで17.848km＞ ルート3号は、北米の支援によって作られたパンアメリカンハイウェイである。北は、アラスカ州を起点として、南北アメリカを1本に結ぶ路である。今、ここに立っているティエラ・デル・フエゴ国立公園がハイウェイの南の最終地点で、上記によれば、17.848kmある。成田空港から、何と長い距離を空を飛び、海を渡ってきたのだらうと、感慨にふけたが、日数を数えてみれば、わずか10日間しか経っていない。この短期間で反対側の南半球まで来てしまったことこそ、驚嘆するのに十分であった。

近くの別の標識でも、＜ティエラ・デル・フエゴ州、南極大陸および南大西洋の島々＞という言葉と地図によって、現在、私たちがいる場所を親切におしえてくれる。標識を見るたびに、ああ、こんな遠い所まで来てしまったのだなあと、認識させられるのである。また、2日前の6日に訪れたフォークランド諸島の地図と＜マルビナス（スペイン語名）諸島は アルゼンチンの領有＞と書かれた看板もみつけた。アルゼンチンにとっては、未だに、解決されていない重要な問題なのであろう。イギリス人のジョン・デービスより前にマルビナスを発見している海図製作者をイギリスは認めているが、ふたたび、アルゼンチンと協議する意志がないことはすでに、先記した（第8日目）。

ここで、少し、人類の誕生を振りかえって見れば、ほんの10日間でここまで来てしまった驚嘆の意味が分かると思う。

私たちの直接の先祖であるホモ・サピエンスがアラスカから、カナダ、北米、メキシコ、中南米をどんどん南下していった、ここ南米大陸の最南端のティエラ・デル・フエゴまで17.848kmの距離を旅した期間は、およそ1000年だと

いう。この千年という時間は、アフリカからアラスカに到着するまでにかかった時間と比較すれば、<わずか>という形容詞がつくほど短期間だそうだ。

ホモ・サピエンス（新人）もまた、その前の原人と同様にアフリカでおおよそ20万年前に生まれた。新人がアフリカを出てから、長〜い旅（グレートジャーニー）が始まった。より暮らしやすい場所を求めて、それぞれ、旅の途中で世界中に散らばっていった。はじめは、それほど広い、遠い地域に暮らすことは出来なかったが、マンモスのような大きな動物を追ううちに、ついに、シベリアの東端、チュコト半島にまでやってきた。1万5千年前だという。ここまで、単純に計算すれば、およそ、18万年以上かかったことになる。現在は、シベリアとアラスカの間には、85kmのベーリング海峡が横たわっている。しかし、当時は氷河期で、今よりもはるかに海面が低く、陸続きになっていたし、大陸棚を形成していた。新人類は、マンモスや野生トナカイなどの動物を追って、アメリカ大陸のアラスカに足を踏み入れたのである。しかし、そのアラスカで長い間、留まざるをえなかった。今度は、氷河期の厚い氷に包まれたカナダの巨大氷床が邪魔をして、南に前進できなかったのである。やっと、氷河期が終わり、カナダの氷が溶け始めてから、新人類は南に向かってふたたび、歩き出した。歩きはじめてからのスピードは人類史上、もっとも速いと言われている。今、私がいる南米最南端のティエラ・デル・フエゴ州に着くまでに<わずか、千年しか、かからなかった>、という表現が歴史の本に使われている。ここまで着いたのは、私たちの直接の先祖の最初のモンゴロイドである。

およそ、1万年前のことである。人類の時空を超越した壮大な旅の物語である。標識の前にしばし、たたずんでいた。その瞬間、はるかなる太古からの風が、ざわざわと全身を包みこむを感じた。

ラバタイアからバスに乗って北へ向かった。およそ20分後にはロカ湖に着いていた。氷河によってできたこの湖はビーグル水道の一部である。湖からの

眺めは絶景としか言いようがない。ウシュアイアの港が近いので、向こうに見える雪をいただいた山脈はマルティアル氷河と思われる。ウシュアイアの町を通りぬけた時に見えた氷河を反対側から眺めているのであろうか。ブルーの空気にすっぽりと包まれてしまったような気分である。ロカ湖は透明なブルー、氷河はところどころ陰に染まったブルー、雲ひとつない底を突きぬけるような清澄な空もブルー、しばし、青い夢の真っ只中にたたずんでいた。辺りはしんとして、ただ々、太古からの神々の存在を示しているかのような厳肅な雰囲気醸しだされていた。このような光景を目の前にして、人はただ、互いに語ることもなく、あたたかも、瞑想しているようにそこに立ちつくしていた。

20 万年前の人類の足取りを懐かしんだりした散策は、ずいぶん長く感じられたが、まだ、午後の陽光が真上から降りそそいでくるには、少し時間があつた。お昼ごはんをいただくために誰もがクルーズ船に向かって足早に歩いていた。

### 3) ビーグル水道の両側にそびえ立つ氷河の間をクルージングしながらチリ領のプンタ・アレナス (Punta Arenas) へ向かう

ウシュアイアには、たったの 8 時間ぐらいいしか停泊していなかったクルーズ船が出港したのは、午後 2 時を過ぎていた。これから、海上からの雄大な風景を愉しめるのだ。プンタ・アレナスまでの航路は、地図を見ると、ギザギザのフィヨルドが描かれている。今回は、私までが航海士になったように、何度も地図を見ながら、船の進む航路を確かめずにはいられなかった。チリ側のビーグル水道とマゼラン・南極州航路は、先記したように、船長が当日の天候や波を見極めて決めていく。この午後のように、雲ひとつない快晴で、なめらかで静かな、波ひとつ立てていない海面は、スケートで滑るように船は、どんな複

雑なフィヨルドでも進めそうな気がした。チリ領のプンタ・アレナスには、明日の午前6時ごろには到着する予定である。

ビーグル水道を縦断して、間もなくマゼラン海峡に入ってしまった。夕方近かったが、陽射しが強かった。もう、ここは、マゼラン・チリ南極州だ。デッキにでてみると、肌寒かった。眼前に氷河に覆われた山々が見え、あっと思わず声を上げてしまった。こんなに近くで氷河を観賞できるのは、初めてだ。海峡には、雪の塊が漂っていた。しかし、ここ数十年、雪の量が少なくて氷河が後退しているようである。氷河の後ろには、鋭い峰が屹立しているダーウィン山脈が見える。マゼラン海峡は全長およそ550km、幅は狭いところで3km、広いところは、30kmもある。今、この大型クルーズ船が速度を落としてゆっくりと進んでいるところは、幅が広いと思った。V字形に大きく湾曲しているところを縦断するルートが地図に示されていたが、前方から眺めてみると、まさにそこを通っているように思われた。進む方向の右手は東で、北東へ延びて大西洋へ、左手の西は、北西へ延びて太平洋へ続く。大西洋と太平洋を結ぶ重要な海峡であったことを実感できた。先に何回もでてきたマゼランが、ここを初めて航行したのが1520年である。彼の名前が海峡につけられた。

さまざまな形体を持った氷河は、人の合理的な力では、真似できない完璧さがあった。ヘルマン・ヘッセ（1877–1962年、ノーベル文学賞受賞のドイツの詩人、作家）の自然観察への慧眼が、記憶に蘇えてきた。不合理で、複雑で、奇妙な自然の形を眺めていると、その独特な魔力に、また、訴えかけてくる深い言葉に、幼い子どもの頃から没頭していたというヘッセ。いつのまにか、人と自然とのあいだの境界がゆらぎ、溶けてしまうのを見て、それは、外部からの印象だけではなく、人の内部から生じたものなのか分からなくなると、ヘッセは省察している。たしかに、人と自然が一体となるような体験をさ

せられたのは、壮大な地球誕生からの長〜い時を経て、常に変化し続けている自然の珍奇な形を目の当たりにしたからだと思う。浄化させられたのか、すがすがしい気持ちになってきた。

明朝、チリの世界最南端の都市、プンタ・アレナスへ入港する。いつまでも、デッキで風を頬に感じ、潮の流れを見、陽の没する前の空の魔術に驚嘆していたかった。

(11) 第 11 日目 プンタ・アレナス (Punta Arenas)、チリ

2 月 9 日 (日)

早朝の黒々とした海の上には、細い朱色の帯が長く延びていた。その上には、微妙な緑青いろの空がひろがっている。10 分後には、少し明るくなった海に金色の帯と黄緑の空と、刻々と繊細な色合いのくみあわせに、人工ではつくりだせないような自然がつくりだす摩訶不思議な光景にしばし、見惚れていた。

アルゼンチンの南部パタゴニアの＜世界最南端の都市＞であるウシュアイアから、チリの南部パタゴニアの＜世界最大都市＞のプンタ・アレナスへやってきたのである。スペイン語で＜砂の岬＞を意味するプンタ・アレナスは、チリの首都サンティアゴから 2400km のところにあり、マゼラン・南極州の州都である。人口は 13 万人以上の、マゼラン海峡に面した大きな港町である。大西洋と太平洋を結ぶマゼラン海峡の発見以来、プンタ・アレナスは航海史上、重要な役割を果たしてきた。また、南極への玄関口でもある。1849 年に建設され、東欧の移民も定住した。現在は、パタゴニアの牧羊による羊毛、冷凍マト



ンの輸出港でもある。また、プンタ・アレナスから 35km のマグダレーナ島には、12 万羽のマゼランペンギンが生息している。

### 1) ブルネス要塞を訪ねる

30 分後の海上には、黄金の光の輪におおわれた白い玉がすっかり全容を表していた。それは、空や海、雲などあたり一面を金いろに染める魔力をそなえていた。その火の玉の前に黒々と細長く横たわっている岬がプンタ・アレナスだろうか。すっかり夜が明けて見えたのは、さきほどの岬に、びっしりと軒を連ねている家々だった。ところどころ間隔をおいて高いモダンなビルも見える。町が＜砂の岬＞とよばれているように、岬の先のほうまで建物があるのが分かる。町のうしろには、低い青い山脈がこれも細長く横たわっている。町の前は、もちろん、今、進んでいるマゼラン海峡である。港の少し手前で錨をおろした船からは、赤や緑、青の屋根のついた白い家々やマンションが鮮明に眺められた。テnderボートに乗ってさわさわした涼しい風に吹かれて岬に上陸し、栈橋の＜PUNTA ARENAS へようこそ＞という看板に迎えられたのは、10 時すこし前だった。チリに着いたという思いで胸がいっぱいになった。チリに初めて入国したのに、何の検査を受けることもなかった。おおらかな国なのだろうか。

チェ・ゲバラが南米旅行日記で、チリについての好い印象をたびたび書いていた。少し、ここに拾いあげてみると、＜人びとはものすごく親切で、どこへ行っても大歓迎された。...つくづく、チリ人の人情の厚さは、この隣国への旅を大変快適なものにしてくれる...僕らは王様のような接待を受けた。...チリ人の人情の厚さが、...ずるずる引き留めていた。...心温かな国チリ...チリでは、人と知り合うということは生活を共にするということであり...＞ ああ、これ

ぐらいにしておこう、最後にチリの女性たちについて<彼女らは、...天性のものと  
いうか新鮮なというか、すぐに人を虜にってしまう、チリ女性の気品を代  
弁しているような人たちだった。> このようなチリ人の親切さ、人の好さは、  
決して特殊な例ではない。ガイドブックにも、ほかの南米に比べて治安もいい  
し、人なつっこくて、陽気で面倒見がよくて、親切だと、書かれていた。で  
は、私にとってのチレーノは、どうなのだろう。何だか、胸がわくわくして  
きた。

ここから、およそ 60km のサンタ・アナ岬のブルネス要塞を訪れるためにバ  
スに乗りこむ。マゼラン海峡は、すでに先記したように、大西洋側の入口の部  
分のみが、アルゼンチン領で、その他の全部はチリ領だが、1843 年、チリ政  
府は海峡の領有を確定するため、海峡の中間地点にブルネス要塞を築いたので  
ある。

陸路をとって行くために、今、バスは南の方に向かって軽快に走ってい  
る。左手には、マゼラン海峡が見える。右手は牧業を営む農家の青々とした放  
牧地帯が広がっている。

バスが着くまで、ブルネス要塞が築かれるまでのチリの歴史を少したどっ  
てみたい。1541 年、スペイン人のペドロ・デ・バルディビア (Pedro de  
Valdivia, 1497-1553 年) が現在の首都であるサンティアゴを建設し、チリは  
スペインの植民地となった。しかし、自然環境は厳しく、南には、手強いマ  
プーチェ (アラウカノー拙著<中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その  
1>を参照してください) 族の抵抗があったため、征服・植民事業は困難を極め、  
植民地時代のチリの領域は、サンティアゴの南へおよそ 400km にあるコンセ  
プシオン (Concepción) が南限であった。つまり、パタゴニアでのスペイン  
による植民化は失敗したのである。1818 年にオヒギンスを先頭とする独立運

動派は、アルゼンチンのサン・マルティンの支援を得て独立を宣言した。その後、紆余曲折を経た 1830 年に、ヨーロッパ型の立憲政治を確立させて、チリの政治は安定した。

およそ、1 時間弱でブルネス要塞に着いた。坂を上っていくと、丸太でがしりと作られた建物が見えた。その近くに、チリの国旗が風になびいていた。上半分の白と下半分は赤で色分けされている。白はアンデス山脈に積もる雪、赤は国花コピウエ花と独立戦争で流された戦士の血をそれぞれ表す。白の左片隅に描かれている青地の白い星は、チリの統一を表している。すっきりしたデザインの美しい国旗である。先を鋭く削った丸太の柵がぐるっと建物を囲っている。下をふり返ると、薄青色のマゼラン海峡が灰色がかった雲の下に横たわっていた。入口の傍に＜ブルネス要塞＞と書かれた看板がでていた。

＜ブルネス要塞は、南部地方におけるチリが最初に居留した場所である。ここ、サンタ・アナ岬に、1843 年 10 月 30 日、建設された。防衛および水、食料、木材などの供給が常時、可能であるという条件がそろっていたからである。

時の経過とともに、戦略的にも重要な役割を果たしてきた。マゼラン海峡におけるチリの存在を明白にし、原住民との交流を深めていった。

しかし、やがて、気候条件の厳しさにより、居留民たちがここで生活していくのが困難になってきた。最終的に、居留地を変更することになり、1848 年 ブンタ・アレナスが建設された。

現在の要塞は、当時建設されたものではなく、1943 年に再建されたものである。しかし、100 年前と同じ技術を使い、斧のみで丸太状の外枠が作っている。サンタ・アナ岬およびブルネス要塞は、1968 年国立歴史記念碑になる。＞

大体の概要が分かったので、点々と建物がたてられている広い敷地を歩きま

わってみる。さきほど見えたマゼラン海峡を見おろす小さな防舎（Casa Fuerte o Blocao）も含めて、北と南にそれぞれ3つの要塞がある。横に大砲が据えられているところもあった。それらに挟まれて兵舎、牢獄、将校の住まい、弾薬庫、総督の住まい、礼拝堂などがある。それらから、少し離れたところには、牧場、農場、家畜小屋、イギリス人の大工の住まい、などがある。建設された最初のころは、兵士など、22名ぐらいの人たちがいたという。

説明のとおり、全ての建物が丸太状の外枠で建てられていた。礼拝堂には、塔の上に十字架がつつましく飾られていた。さすがにカトリックの国、チリである。作業の合間や、日曜には、膝をついて頭を垂れてお祈りをささげていた彼らを偲んで気持ちが和やかになった。ほっとできる唯一の場所であつたろう。

中に入ると、シンプルな丸太の祭壇の前に大きな十字架のみが掲げられていた。左横には、幼子イエスを左腕に抱えた端正な美しいお顔立ちのマリア様が静かに立っておられた。ちかくの窓から、かすかな朝の陽光が射して、おふたりの顔がほっと明るく浮かびあがっていた。薄暗い礼拝堂の中で、その一角だけが何か神秘的で厳肅な空気に包まれていた。

兵舎に使われていたのだろうか。ある大きな建物の中が展示室になっており、詳細にブルネス要塞が建設された当時の状況の説明文が、そこここに展示されていた。重要な部分だけを先記の説明に付け加えると、＜先記の独立運動派のベルナルド オヒギンス（Bernardo O'Higgins）が亡命地のペルーからマゼラン海峡の領有に着手した。1841年マニュエル ブルネス（Manuel Bulnes）政権が、ホーン岬までの航海支援に乗り出した。その後の試行錯誤を経た1843年9月21日、サンタ・アナ岬に乗組員が器材を設置して、隊長のファン ウィリアムズが午後2時にチリ共和国の名の下に、マゼラン海峡の領有を宣言した。その後、ただちに難しい天候にもかかわらず、ブルネス要塞建設が始められた。最初の建物は、2階建ての防舎である。防衛および軍人と平民の

ための部屋である。1階ができた時点の1843年10月30日、隊長のファン ウィリアムズ (Juan Williams) が厳かにブルネス要塞の落成式を行った。囚人と彼らの家族の到着とともに、1847年には、30の建物が増築された。防御柵の内部には、防衛のための軍隊がいた。柵の外には、民間の居留地があった。彼らは、農業、牧畜、採集、物々交換などにたずさわった。要塞での生活はとても厳しかった。寒さ、それに耐える衣服や建物の貧弱さなどによって、病気がはやり、毎年薬が足りなくなった。>

1847年には、サンタ・アナ岬の人口は346人まで増加していった。しかし、やがて、飲料水の不足と火災がおり、もはや、ここを撤退せざるを得なくなり、1849年ブンタ・アレナスへ移動することとなった。56kmまでの距離を居住者たちは、荷物を担ぎ、家畜を牽いて歩いていかねばならなかった。

今朝、入港した人口13万人以上のモダンで綺麗なブンタ・アレナスの都市は、先記の人たちの流入とともに発展していったのである。今では、羊毛や天然ガスの油田、カニなどのシーフード産業が盛んである。

## 2) サレシアーノ博物館で先住民について学ぶ

左手にマゼラン海峡、右手に放牧地帯を眺めながら南へ、バスが走っている。囲い場の中で、馬や羊が草を食んでいる。先のチェの指摘のように、親切で快活なチリ人の若いガイドのマリオによると、農家は、この辺りのおいしい水を町まで運んでいる。点々と見える洗練されたイギリス風な家々は、別荘だという。白い壁に赤い屋根、ドアや窓の木枠は茶色で、とてもおしゃれである。バスの大きな窓からどこまでもつづく海峡や平原、かわいらしいヨーロッパ風の家々を飽きることなく堪能しながら、およそ1時間ちかく走って、バス

が大きなレストランの前にとまった。もう、とくに、12時は過ぎていた。近くの地元の食材をたっぷり使ったボリュームいっぱい肉類が深底のフライパンの上にのせられて、素朴な感じの娘さんたちによって運ばれてきた。肌がつやつやとして可愛らしい。チェが魅かれたのが分かった。今、とおってきた農家のマトン、チキン、豚肉だろうか。さきほどから厨房で骨をナタのようなもので切断している音が聞こえてきた。その後、タレをつけながら、網でジュージューと時間をかけて焼きあげたのであろうか。おいしそうな肉の焼ける匂いが、細長いテーブルの上に漂っていた。少量ずつ、それぞれの塊からいただいた。このレストラン自慢の濃厚なタレを味わっているうちに、ほんわかった幸せな気分になってきた。

心も胃もみたされて、プンタ・アレナスに戻り、サレシアーノ博物館へ到着した。このマゼラン海峡に面した港町は、碁盤目状につくられ、よく整備されている。中心の広場から北へ数ブロックあるサレシアーノ博物館は、19世紀末、サレジオ会（Juan Bosco というイタリア人が創設者）宣教師によりつくられた。バタゴニアの動植物、歴史、文化、先住民の生活様式などを紹介している。館内のパネルの紹介によると、＜サレジオ会はマゼラン州に1887年創設された。ヨーロッパ文化を押しつける厳格な抑圧者たちに苦しめられていた先住民族を援助した。（当時の）サレジオ会宣教師たちは、ヨーロッパ諸国の重要な博物館からバタゴニアの民族資料を依頼された。＞

しかし、後に紹介するように、彼らに良きことと考えたヨーロッパ文化の押しつけが、彼らの命とりになったのは、皮肉な事実である。

バタゴニアのティエラ・デル・フエゴ州には、先記したように、オナ、アラカルフ、ヤーガン（ヤマナ）などの先住民がいた。博物館の中に入ると、模型やパネルで先住民が、どのように生活していたのかが、簡単な説明文で分か

る。チリで、はじめて、洗礼を受けたのが1520年とある。これは、むろん、たびたび、今まで登場しているマゼラン一行によるものである。

牧草地に作られたテントの中で、焚火に温まり、裸体の上に毛皮だけをまわって寒さをしのいでいた。マゼラン以降、ヨーロッパ人がここまで来て、住みつくことがなかったのは、すでに説明してきた。しかし、19世紀初頭になると、キリスト教の布教のため宣教師がきたり、入植者が入ってきた。宣教師が、ふだん裸体で過ごすヤーガン族に服を着せた。雨が降ると、今までは、裸体を焚火で乾かしていたが、服を着ていては、すぐに乾かずに、よく風邪を引くようになった。また、衣服を着るのを教えはしたが、それを洗濯するのを教えなかったのも、感染病が流行り、死者が多くでるようになった。また、牧草地で羊などの家畜を飼育する入植者が増えるにつれて、彼らと先住民の間に競争が高まってきた。先住民のほうは、従来どおり、獲物を求めての移動生活が中心であった。獲物をとりあうようになれば、飼育をしている入植者が安定して供給を得るのは当然である。こうして、食料不足と感染病とで、先住民は減少していった。こうした牧羊業の発展だけではなく、東部、および南東部海岸で金鉱が発見され、ヨーロッパ人の入植が増加し、彼らがもたらした疫病により激減していった。現在では、ほとんどが絶滅してしまったようである。

先記した北東パタゴニアに住むテウエルチェ族(アオニケンクー AONIKENK)を描いたパネルの中で目を引いたのは、品物の物々交換場面である。数人のしっかりした顔つきのテウエルチェが集まっている。中のひとり、商いの男らしい。誰もが衣服をまとっている(上記によれば、19世紀初頭であろう)。幾つかの品物は、南米諸国のパンパで16世紀以降使われていたぐるぐる巻きにされた投げ縄と十数個の丸い石である。スペイン人によりもたらされた牛馬の牛は、野生化して急増した。隊伍を組んだ牧童(アルゼンチンでは、ガウチョ、チリでは、ウェアソ—Huasoと呼ばれていた)たちが、原野の奥深くま

で馬にまたがり、牛を追いつめ、投げ玉でしとめるのである。その牛の皮を輸出するのがパンパの主要産業になっていった。18世紀半ばころから野生牛の減少に伴って放牧にとって代わられたが、維持はされていた。この絵がそれを証明しているのが興味深い。牧童の多くは、白人かメスティソである。黒人、ムラート、先住民はわずかであった。ちなみに、生粋のテウエルチェ族は、ほとんど絶滅した。現在は、混血のテウエルチェ族がアルゼンチン北東部から南東部にかけておよそ5000人ぐらい住んでいるという。白い肌や、少し浅黒い肌などを持ち、いろいろな職業についてたくましく生活を営んでいる。

もちろん、物品の中には、商い人が手にしているマテ茶もある。すでに顔なじみの者たちが、マテ茶を回し飲みをしながら、なごやかに商談をしている光景が面白い。先記したように、マテ茶は南米大陸原住民の先住民が薬用に供していたということが、この絵によって明らかになった。現在、チリではブラジルからかなりの量を輸入しているという事実から見ると、当時は、隣国のアルゼンチンの先住民から商人が買って持ってきたのだらうと、推測される。アルゼンチンのパンパで牧童たちが危険な共同作業の合間にマテ茶を回し飲みして、いっそうの絆を深めていったのである。なんという温かい飲みものであるうか。

取引されているグアナコの毛皮のマントから、テウエルチェ族がグアナコのような小型の動物を狩猟していたことが分かる。それは、雪や風から身を守るための必需品であった。また、弓矢、矢尻は、狩猟のためと同時に大型の動物から身を守ってくれた。ちかくに展示されている模型によると、彼らが住むテントもグアナコの皮を伸ばして木柱に被せた素朴な作りであった。

乗馬用のあぶみ、馬皮などの取引物品から、不毛の原野を縦横無尽に馬で駆け抜けて狩猟をしていた遊牧民であったことも容易に推測される。

この1枚の絵のパネルからだけでも、少なくとも、19世紀のテウエルチェ族が大自然の中でどのように生活してきたのかが理解できて面白い。



マテ茶の匂い、青々とした草原の芳香、雑多な動物の毛皮の臭いなどが風にのってこちらまで漂ってきたような気がした。また、彼らが交わしているアオニケン語までが聞こえてくるようで、いつまでも絵の前に佇んでいた。

### 3) スペイン人航海者のマゼラン海峡における波乱万丈の航海物語

プンタ・アレナスとマゼラン海峡を見下ろす展望台は、<クルス—Cruz、十字架—の丘>とよばれている。少し離れた後ろに高さ 24 メートルの大きな近代的な十字架が立てられている。1987 年に最終的に再建されたものである。それほど、この丘は暴風にさらされ易い場所なのである。1584 年スペイン人、サルミエント・デ・ガンボア (Pedro Sarmiento de Gamboa, 1532–92?) がマゼラン海峡に着いた時、ふたつの都市を建設した。この丘に、そのうちの最初の都市<ノンブレ デ ヘスス—Nombre de Jesús—イエスの名前>が建てられていた。

ここで、登場してくるのが、スペインの宿敵であるイギリスの航海者である副提督のドレーク (Francis Drake, 1543 ? –96) である。1567–68 年に、メキシコ東岸でスペイン艦隊の猛攻にあって以来、復讐の鬼と化し、パナマ地峡のスペイン植民地を猛攻撃したりした。常にスペイン人の新航路探検を探っていたドレークは、同時に 1577 年に世界周航を試み、78 年にマゼラン海峡に到着した。イギリス国王の庇護下で活動していると思われるドレークの新しい攻撃を恐れて、スペインのフェリペ国王は、マゼラン海峡の要塞建設を決意した。その使命を任されたのが、サルミエント・デ・ガンボアであった。彼は、<マゼラン海峡への旅>という肉筆の原稿を残した。1768 年マドリッドで出版された。航海における詳細な日誌だけが綴られているのではなく、南部地域の地図までが記載されている。以下は、ガンボアの壮絶な記録の一部によるも

のである。スペイン人の探検者、航海者あるいは、コンキスタドールの一人ひとりに壮大なドラマがあるのがよく分かる、航海日誌である。

当時、ガンボアはペルー副王（スペイン国王の代理としてペルーを統治）の要請を受けてペルーで「インカ史—Historia de los Incas」を執筆していた。彼は、1579 年 10 月、ドレークの進路を絶つために 2 隻の船でマゼラン海峡に赴いた。嵐や食料不足で一隻を放棄しながらも、やっとなのおもいで 80 年に同海峡に到着した。その年、同海峡の植民地化を主張するガンボアはスペインに向かった。途中、乗組員たちも含めて食べたり、飲むことすらままならず、途中、ベルデ岬（セネガル、アフリカ）の大西洋に浮かんでいる島に漂着した。彼らを見物にきた島民たちは、これは、奇跡だと言って驚嘆した。その後、スペインに無事、着いたガンボアは、フェリペ 2 世国王からマゼラン海峡の植民地化計画の同意を得ることができた。また、探検隊長には、ディエゴ・フロレス・デ・ヴァルデス（Diego Flores de Valdés）を任命し、ガンボアは、同海峡の総督という地位を得て総指揮を取ることとなった。この計画は、一般市民の入植だけではなく、同時に海峡を軍事拠点とする一大事業であった。

23 隻の船に兵士、職人、百姓、女性や子どもたちを乗せて、大砲を備えた 2 都市を建設するのが目的であった。1581 年 9 月に出港した船団を大嵐が襲いかかり、5 隻の船と 800 名の命を失い、スペインのカディス港に戻らなければならなくなった。同年 12 月に、ふたたび出港したが、ペスト発生により、大西洋横断中に 151 名が死亡した。1582 年 3 月に、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロに漂着したが、その内の 200 名が命を失った。

こんな状況下でも士気を失うことのなかったサルミエント・デ・ガンボアは、残りの者たちを鼓舞し、同年 11 月、傷んだ船を南の方角に向かって前進させた。リオ・デ・ラ・プラタ（ブエノスアイレスとモンテビデオ間を流れている

ラ プラタ川) の辺りに来ると、一隻が夜間、沈没して 350 人が海底に沈んでしまった。1 名も助けられなかったことに驚愕したヴァルデス隊長は、ブラジルに戻るようと、命令を出した。リオ・デ・ジャネイロの近くに来た時に、さらに 2 隻を失った。

年が明けた翌年 1583 年 1 月にガンボアは、ヴァルデス隊長を引きずるようにして出港させた。まだ、9 隻残っていた。しかし、沖に出るやいなや、一隻を失った。ラ プラタ川に到着したとき、同行していた、後にチリの総督になるアロンソ ソトマジョール (Alonso Sotomayor) は、3 隻のカラベル船とともにブエノス アイレスに向かって出港してしまった。先記したように、ブエノス アイレスは 1580 年にファン・デ・ガライ (Juan de Garay) によって建設されたばかりであった。

スペインを 2 年前に、23 隻の船舶で出港したガンボア一行がわずか 5 隻の船でマゼラン海峡の近くに到着したのは、1583 年 2 月 1 日であった。しかし、その日の天候が最悪であったために、隊長が海峡の入口を間違えてしまった。すっかり、疲労困憊し気力をなくした隊長は、スペインへの帰国を決意した。

一行がリオ・デ・ジャネイロに着くと、スペインから送られてきた 4 隻のカラベル船とすでに建設されていたと本国で考えられていた植民地への救援物資が待っていた。

このような本国からの援助でガンボアは、冒険を続けることにした。しかし、すっかり意気消沈していたヴァルデス隊長は、3 隻の船でスペインに戻っていった。それまで一緒に行動していたふたりが、ここにきて離ればなれになったのである。

ガンボアは 5 隻の船と女や子どもが含まれた 538 名と一緒にふたたび、マゼラン海峡に向けて出発することにした。ガンボアによると、これらの人々は、みな憔悴しきって、びくびくした様子をしていた。それにもかかわらず、彼らの長であるガンボアはくこれから来るべき運命に任せること、決してスペイン

には戻らないこと、彼を知っている人たちの所へは行かぬこと、死を受け入れること＞などを固く決意していた。

1583年12月、ついに、リオ・デ・ジャネイロを出航した。一隻だけが、海峡に着かずに難破した。1584年2月、ついに、サルミエント・デ・ガンボアはマゼラン海峡に入った。4日目に数名の修道士、百数十名の兵士、48名の水夫、58名の入植者、27名の労働者、13名の女性たち、10名の子どもたちと数名の側近たちが下船した。

2月11日、ガンボアが、先記したプンタ・アレナスを見下ろす展望台＜十字架の丘＞の後ろに都市＜ノンブレ・デ・ヘスス＞創設の式典を執り行った。

また、3月25日には、先記した、数百年後に築かれることになるプルネス要塞の場所に2番目の都市＜レイ・ドン・フェリペーRey Don Felipe, ドン・フェリペ王＞が建設された。

ガンボア総督の鉄の意志が2つの植民地を辛うじて維持していた。反乱を鎮圧しなければならないことも起こった。天候のよい秋が終わり、冬が南部を襲い、何週間も雪が降り続いた。たくさんの病人、死者がでた。しかし、何事もガンボアをうちのめさなかった。彼の船＜サンタ・マリア号＞でふたつの植民地を行ったり来たりして武器、大砲、食料を運びこんだ。

5月26日、＜今まで出会ったこともない高波と暴風＞に襲われ、＜ノンブレ・デ・ヘスス＞コロニー近くで一隻の船が流された。ガンボアは真冬の悪天候のため、1か月間、もうひとつのコロニーには行けなくなってしまった。食料が尽きてしまったその入植者たちは、＜猫や大砲の皮＞まで食べて、しのぐより他なかった。

敗北感におそわれたガンボアは、ついに北部へ進路をとった。7月、食料を南部のコロニーへ持ち帰るためリオ・デ・ジャネイロに到着した。そこから、

海峡へ向けて（物資を積んだ）船を一艘送ったが、運悪く難破してしまった。リオ・デ・ジャネイロにふたたび、救援を依頼したが、拒否され、ガンボアが近くの別の港に向かう途中、＜サンタ・マリア号＞が嵐により、海岸の岩に砕かれてしまった。小型のボートでコロニーにはどうやっても戻る決意をしたが、南部へ戻ることを拒否した乗組員たちが反乱を企てた。どうにか収めたガンボアには、船が一艘も残されていなかった。しかし、神が何かをお与えくださるだろうと、ガンボアは考えた。

これら全ての災難は、冬、春、夏の期間中に起こった。もはや、秋に南部地域の自分が建設したコロニーに戻れなくなってしまったガンボアは、スペインに救援を頼んだが、何の返答も得られなかった。そこで、彼自身が宮廷に赴いて、依頼することにした。長い間、消息がつかめない入植者のために急を要していたのである。まだまだ、波乱に満ちたガンボアには、災難が待ち受けていた。

1585年6月、滞在していたブラジルを出航したが、大西洋のカリブ海諸島を荒らし回っていたイギリスの海賊の手中に落ち、イギリスまで連れていかれた。フェリペ王がガンボアを救出するのにかなりの時間がかかったが、ついに、釈放されたガンボアがスペインへ向かっている途中のフランスの海域で、今度は、カルバン派プロテスタントに捕らえられ、フランスに連れていかれた。そここのじめじめした独房に3年8カ月も拘留された。フェリペ王が救出するのに、今回も膨大な時間と金銭がかかったが、ついに、ガンボアは無事にスペインにたどり着いた。湿気が多い独房に入れられていたせいで半身不随になったガンボアは、着くやいなや、担架に運ばせて宮廷に現れた。

鉄の意志の持ち主であるガンボアはくじけなかった。担架で宮廷中をうろついて、数年前にスペインから遠く離れたコロニーに残してきた入植者の救援を依頼してまわったが、誰にも相手にされなかった。当時、ヨーロッパで起こっ

ていた急を要する戦争状況下で、いったい、誰が＜マゼラン海峡の統治＞に注意を払ったであろうか。

1591 年が、ガンボアの最後の日誌となってしまった。＜陛下、どうか、あんなに遠方で怖ろしい地域に残されている貴殿に仕えている常に忠実な臣下たちを思いだしてくださるようお願いいたします＞ひと時も、ガンボアに入植者たちを忘れたことはなかったが、ガンボアの話は、それ以来、ぷつりと消えてしまった。

ふたつの植民地＜Rey Don Felipe＞と＜Nombre de Jesús＞の住民たちは、どうなってしまったのだろうか？

1587 年 1 月、イギリス人の海賊に唯一、救出されたトメー・エルナンデス（Tomé Hernández）の証言のおかげで、知ることができる。エルナンデスによると、食料は 1584 年の半ばでなくなった。2 年間は、魚介類の採集で命をつないだ。1585 年＜Nombre de Jesús＞コロニーには、50 名ほどがいた。エルナンデスだけが上記の海賊の救出を受け入れた。ガンボアが 300 名の入植者をいれた＜Rey Don Felipe＞コロニーで海賊が目にしたのは、飢餓と寒さでなくなった死体だけであった。それ以来、そこは、＜Puerto de hambre—飢餓の港＞と名づけられた。

ガンボアの歴史的な皮肉は、マゼラン海峡における要塞建設の動機となったイギリス人ドレークが、マゼラン海峡にも南米の太平洋側海岸にも、あれ以来、2 度と現れなかったことである。

地図製作者としてのガンボアは、＜南の大きな島＞となづけたオーストラリアの位置を地図に正確に示している。また、南太平洋の潮流を特定させた。

ガンボアはアメリカ全体像に対する展望を抱き、その防衛計画を立てていた。

彼の遺体は、初めて、マゼラン海峡へ向かって船出をしたカディス（スペイン南部、大西洋岸の港町）の教会に安置されている。ガンボアは波瀾万丈の一生に、彼自身を超える絶対的なもの、神的なものに最後まで仕えたことにより大いなる意義を与えた。

自分の力の限界を超越し、自身の安泰をも顧みず、真剣に対処すべき何ものに、ひたすらに一生を捧げたガンボアに、私は深い共感を覚えた。

#### 4) プンタ・アレナスの広場にあるマゼラン像

クルスの丘の展望台から数ブロックのところにある町の中心、ムニョス・ガメロ広場（Plaza Muñoz Gamero）に向かった。ここで、今日は、見学が終わる。日曜日のせいか、街路を歩いている人はあまりいない。商店が閉まっているので、がらんとしている気がした。カトリックの国では、日曜日は安息日なので、観光客目当てでない店は、たいてい閉店している。或いは、午後の今頃は、シエスタの時間かもしれない。広場は、観光客で賑わっている。スマホでマゼラン像をさかんに撮っている。それほど広くない広場には、それしか見学するものがない。隅のほうにいくつかのベンチが木陰に据えられていて、にぎやかにおしゃべりをしているのも地元の人ではないようである。

遠くから眺めたマゼラン像はかなり大きい。ところどころ赤いペイントが塗られて汚されている。それはそうだろうと思う。大砲に足をかけ空を見上げているマゼランは傲岸そのものに見えるが、以前、アフリカ探検で足におおけがをして、生涯、片足が不自由になってしまったマゼランのこのポーズは、とても自然なものなのであろう。マゼランの足元には、先住民が、マゼランとは対照的に頭を下げて、手に武器を持ち、膝を曲げて腰を下ろしている。先住民の上には、マゼラン隊によって命名された＜TIERRA DEL FUEGO—火の島＞

という文字が見られる。この地方に居住していた先住民を総称して＜フエゴ島民＞といい、先記したようにヤーガン、アラカルフ、オナなどの部族がいた。フエゴ島民に初めて接したヨーロッパ人は、マゼランであった。それ以来、少しずつ、白人の入植者が増えてくるのである。それにつれて、先住民人口が減少していき、今日では、ほとんどが絶滅してしまった。

マゼラン像の台座の下部には、海峡発見の400周年を祝して＜ホセ・メネンデス—JOSÉ MENENDEZ＞が寄贈したという文字が彫られている。マゼラン像には、発見者、言葉を変えれば、征服者と征圧された被征服者の対比があまりにも、あからさまに顕示されている。赤いペイントで抗議する者がいてもおかしくはない。現在では、国によって、こういう種類の像が撤去される傾向がある。

フェルナンド デ マガジャネス (Fernando de Magallanes, 1480–1521—フェルナンド・デ・マゼラン) は、アフリカ探検からポルトガルに戻り、時のポルトガルのマヌエル1世王につぎの航海計画を以下のとおり、説明した。スペイン人バルボアが1513年9月に＜南の海—太平洋＞を発見（拙著、中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その2を参照してください）したことにより、ふたつの大洋に囲まれているアメリカ大陸を横断できる海のルートがどこかにあるにちがいない。ふたつの大洋をつなぐその海のルートを探り、香料島に到着したい、と。しかし、その申し出は拒否されてしまった。そこで、ポルトガル国籍を捨てて、スペインに渡り、スペイン、カルロス1世王により、援助を得ることができた。

マゼランは1519年9月、カディスのサンルーカル港から、5隻の船と265名の乗組員とともに出航した。南西に進路をとり、海岸沿いに進み、ラプラタ川の河口を探索した。（現マゼラン海峡ちかくの）サン・フリアン湾（Golfo de San Julián）で船長たちの反乱に対決しなければならなかったが、その後、およそ、5か月間近辺の海岸を探索した。ふたたび、大陸に沿って南下を続け



たが、何の結果もえられなかった。

乗組員の士気が完全に失われてしまう寸前の 1520 年 10 月 21 日、海岸の入口を発見した。マゼランは、一艘の探査船を送って探索にあたらせた。そんな中で、その船の乗組員たちは、船長を無理にスペインに帰らせてしまうような事態も起こった。発見できずに戻ろうとしていたところ、偶然にも、現マゼラン海峡を通りぬけてしまった。その海峡は＜全ての聖人—Todos los Santos＞と命名された。その日、11 月 1 日は、スペインの＜全ての聖人の祝祭日＞であった。

その後、香料諸島を探すために航海を続けたマゼランは、1521 年 4 月、フィリピンのセブ島に到着した。近くの島のひとつで原住民との戦闘中に命を失った。生き残った乗組員たちは、2 艘の船で香料諸島を目指して出航した。

マゼランに同行していた Victoria—ビクトリア号のみが、ファン セバスチャン エルカノ (1476?–1526, Juan Sebastián Elcano) の指揮下、探検を続行した。アフリカ最南端の喜望峰を巡って、アフリカ大陸の海岸をさかのぼり、世界周航 (1519–21 年) という偉業を成し遂げた後、スペインのセビージャに 1522 年 9 月初旬に到着した。

マゼラン海峡発見のみならず、スペイン人による世界周航までが達成されたことになる。

今日も長い一日だったという感想を抱いた。航海者、探検者、先住民族など、歴史に登場する多彩な人物像には、いつもながら、驚嘆させられる。それぞれが、異なった状況下で互いに激しく、荒々しいせめぎ合いをしながら命を懸けて生きてきた生きようを学ぶことができた。歴史から学ぶことは多い。

最終のテnderボートが出るまで十分な時間があつた。広々とした待合室の入口に、＜ 500 Estrecho de Magallanes. Punta Arenas Chile—500 周年 マ

ゼラン海峡 プンタ・アレナス チリ>という文字に目を奪われた。氷河を背景に何艘かの船を浮かべたマゼラン海峡の写真の前に先住民の男女をあしらった大きなオブジェが飾られていた。先記したように、マゼランが大西洋と太平洋をつなぐ海峡を発見したのが、1520 年だった。あれから、今年 2020 年まで 500 年が経過したことになる。まさに、500 周年に、マゼラン海峡を訪れたという幸運に遭遇したことに深い感慨を覚えて感謝した。ここ数十年、自分の名を冠した海峡を氷河を観賞するために、世界中から大勢の観光客がクルーズ船で押しかけていることなど、マゼランは夢にも思わなかったであろう。500 年後の世界を私たちが想像できないのと同じように.....

この待合室の入口の同じ場所に< 1000 周年、マゼラン海峡.....>と言う文字が果たして見られるだろうか？

船がまだ、明るい夜 8 時過ぎ、レモン色の光芒を儚げに残りおしそうに射している海上をゆっくりとすべるように出港した。気の早い月が、薄青い光を放ちながらぼつんと遠方に昇っていた。デッキは、やがて少しずつ、夕闇の静けさに包まれていった。神の息吹がさっと海から頬をかすめたとおり抜けていった。汚れない自然のひと吹きは、1 日の終わりにとてもふさわしかった。

(12) 第 12 日目 アンデス山脈に囲まれたフィヨルドの小さな港町、プエル  
トチャカブコへ向けて終日クルージング

2 月 10 日 (月)

プンタ・アレナスは、全長 550 キロのマゼラン海峡のほとんど真ん中にある。太平洋へ抜けるためには、まず、南下しなければならない。地図でそのルートを調べてみると、水路は V 字形に大きく屈曲していてかなり狭い。たくさん

の島が形成しているフィヨルドの発達しているその水路は、かなり複雑である。眠っている夜中に V 字の底辺まで、つまり南へゆっくりと進んだようである。今、眺めている水路は、比較的、幅が広く感じられた。幅はいちばん広いところで 30km あるそうである。およそ、夕方 6 時前後には、太平洋側の海峡の入口を抜けるらしいので、今日は 1 日中、マゼラン海峡の光景を観照できる。両側に繰り広げられる雄大な氷河の山脈や、フィヨルドが持つ静かで、力強い生命力をどれくらい感知できるであろうか。特に、氷河が数万年をかけて後退したり、発達したりしながら刻々とその姿を変えながら生きている自然の形象を観照したかった。

安定したゆっくりとした速度で船が進んでいる。遠方に低いたくさんの山々が連なり、山頂に雪を被っているのも見えてきた。空に浮かぶ雲も山並みも海も、すべてが薄い清澄な青色で統一されている。夏とはいえ、寒冷地のチリのマゼラン、南極州を進んでいるので、デッキにいる時は、フードつきジャケットを着こんでいる。午後 4 時ちかくになると、青い山脈の向こう側に氷河の山脈がちらほらと遠望できるようになってきた。寄港はしないが、バタゴニア南部氷床の起点となるプエルト・ナタレスの手前あたりを通過していることが分かる。ナタレスはプンタ・アレナスから 250 キロのところにある。世界最大の山岳氷河であるバタゴニア南部氷床は、南北 300 キロ、東西 100 キロにもおよぶ氷の大地が広大な範囲に渡って続いている。船からは、天空にそびえる氷河の山脈にさえぎられて、壮大な氷床は見えない。すでに、多数の登山隊、探検隊が氷床の縦断や横断に成功しているという。

氷床は、太平洋から雪を運んできた偏西風が、アンデス山脈にぶつかり、大量の雪をふらせ、凍らせてできる。地図を見ると、アンデス山脈は上記のプエルト・ナタレスから北に向かって形成されていることが分かる。

夕方、予想より 1 時間くらい前の 5 時ごろには、船がマゼラン海峡をぬけて

太平洋側に無数に形成されている島と島間の水路、つまりチリ・フィヨルドに突入していった。そして、有名なアマリア—Amalia（別名スクア—Skua）氷河が忽然と目の前に現れた。快晴であり、上記の偏西風が穏やかであったために予想の時間よりかなり前であった。今日のような絶好日和は、非常に珍しいと何度もガイドに言われた。この氷河は、先のパタゴニア南部氷床を起点とするベルナルド・オヒギンス国立公園（Parque Nacional Bernardo O'Higgins）にある。アマリア氷河は、1945年から1986年までの40数年間で、温暖化と雨の減少により、オヒギンス氷河とともに7キロも後退した。南部氷床にあるたくさんの氷河の中で、かなり激しい後退だという。それでも、威風堂々とした粗削りな男性的な美しい氷河に圧倒された。（オヒギンスは1800年代にスペインからのラテンアメリカ独立に貢献したチリの英雄の名前である。）英雄の名を冠したこの国立公園は、チリにある国立公園の中でいちばん広く、およそ350万ヘクタールもある。パタゴニア南部から中部に位置しているマゼラン州からアイセン州まで広がっている。

プエルト・ナタレスを出ると、チリ・フィヨルドの狭い水路が続く。北上しながらおよそ120キロほどを進んで行く。右手に眺められるのは、パイネ国立公園にある氷河によって削られた、標高3000メートルちかい花崗岩の岩峰群である。この国立公園は、大阪府よりもやや小さい自然公園で、年間平均気温は6.5度しかない。デッキにずっと立ちっぱなしで氷河や岩肌がごつごつした岩峰群や針峰岩の写真を撮っていれば、寒くなるはずである。やがて、雪に被われたパイネ国立公園の最高峰であるパイネ・グランデ山（Cerro Paine Grande）が神々しい姿で現れた。4つの峰の最も高い主峰は3050メートルもある。万年雪を頂いている。目の前のその夏山も全体が雪に輝いている。東側には、フランセス氷河が流れ出しているが、船上からは見えない。パイネ国立公園を象徴する3本の岩峰が並ぶトーレス・デル・パイネが眼前に出現した。

およそ、1200 万年前に地下から隆起した花崗岩の岩山である。もっと目を奪われたのが、この岩山の後ろに見える鋸のように頂きがぎざぎざに尖っている針峰群である。自然が形成した複雑な岩山は、魔術師のように、デッキの乗船者の目を捉えて離さなかった。傲然と孤高の姿をさらしていた。パインのこれらの山々は、標高はそれほど高くないが、険しさ、降雪の多さ、風の強さ、変化しやすい天候などにより、登山者にとって登頂するのは、難しいという。しかし、ここ数十年、世界中の登山隊によって登頂が成功しているらしい。

およそ、2 時間ぐらい進むと、ロス・グラシアレス (Parque Nacional Los Glaciares) 国立公園の近辺を船は進んで行く。文字通り、これは＜氷河—Glaciares＞公園である。ここは、南極、グリーンランドにつぐ氷河面積がある。山梨県内と同じ面積の公園内には、有名なペリート・モレノ氷河、ウプサラ氷河などの大きさの氷河あわせて 47 もの氷河がある。また、先記したように、太平洋からの湿った風がアンデス山脈にぶつかって、大量の雪を降らせ、アルゼンチン側に流れて長い長い年月をかけて作った氷河湖もある。南米で 3 番目に大きいアルヘンティーノ湖やビエドマ湖の一部は、園内に流れこんでいる。この氷河の特徴は、動きが活発であることである。冬の最低気温が比較的高いので、氷が溶けたり、ふたたび氷結したりを短いサイクルで繰り返している。

船上から確かに見えたのは、氷河の先端（舌端という）が海の水路に流れこんでいる光景であった。運がよければ、生きもののように、水路に舌を伸ばして伸びていく瞬間も捉えることができる。青白く光っている先端を水路に長く伸ばしている氷河は、美しかった。耳をすませれば、動植物のような息づかいまで聞こえてくる。これは、ペリート・モレノの一部なのだろうか。調べてみると、全長は、およそ 35 キロメートル、高さは、60 ～ 100 メートル、舌端の幅は 5 キロメートルちかくもあるという。また、南部氷床にある氷河のほとん

どが後退している中で、ペリート・モレノは成長しているといわれている。それとも、ウブサラ氷河の舌端を見ているのだろうか。ロス・グラシアレス国立公園のなかで最大の氷河である。長さ 60 キロメートルは南米最長、高さ 80 ～ 100 メートルにもなる。また、舌端の幅は 5 ～ 7 キロメートルある。先のモレノ氷河とは、反対に、温暖化の影響のせいで溶け始め、先端がどんどん奥へひっこんで、氷河後退の典型的な例となっている。

ウブサラ氷河のあたりは、何百万年も昔には、海の底で、周囲には、アンモナイトや、植物の化石がごろがっているという。1981 年に自然遺産として登録されている公園には、観光客も多く訪れる。先記のアルヘンティーノ湖は、ふたつの大きな水道に流れ込み、そこからいくつかの水道に分かれている。

クルーズ船は、大きな氷山を無数に浮かべるウブサラ水道を奥に進み、ウブサラ氷河までおよそ 500 メートルまで近づく。

それとも、見ることもできるもうひとつのスペガッツィーニ氷河かもしれない。私が今、見ている氷河にとってもよく相似している。先端部の高さが、最高の氷河で水路に流れ込んでいる容子は優美である。水を被ってごつごつしている山頂部（上流部—降雪により、氷河が育つところ）と先端部（末端部で溶解、分離する）がすっぽりと、およそ全長 25 キロメートルが全部見える。この氷河はほとんど後退していないという。

プンタ・アレナスから、アルヘンティーノ湖まで、南部氷床およびその東側にひろ広がっている大草原は 700 キロメートルある。その一帯はパタゴニアの風の大地と呼ばれていて、年中、北か西から風速 30 ～ 40 メートルか、それ以上の台風並みの強い風が吹いてくる。クルーズ船は風が来る方向に進んでいる。もちろん、チリ・フィヨルド水路にも、いつもなら強い風が吹くが、今日は、1 日中、そんな強風が吹くこともなく、穏やかであった。＜氷河＞の定義にくたえず、高所から低地へ動いている雪と氷の集塊>とあるとおり、何万年

もの間、生きもののように、これらの氷河たちは、成長、移動、溶解や再結晶を繰り返しては、独特な複雑さを持った奇妙な形を創造してきた。雪から氷への転化は、パタゴニアのような温暖氷河では、10年程度で完結するという。気温が高くなれば、溶解速度が速まり、氷河は後退し、逆ならば、成長を続ける。パタゴニアの氷河は、最近では、19世紀末にもっとも成長し、その後は後退しているという。

氷河に限らず、世界のたえまない創造の表象を感嘆の眼で観照するく私たちの内部で働いている神性と自然の中に働いている神性とは同一不可分のものなのである。自分たちと自然とのあいだの境界がゆらぎ、溶けてしまうのを見る……>、<……このような形象を見つめ、不合理で、複雑で、自然の形に熱中していると、私たちの心と、そういう形象を成立させた意志とが一致するものであるという感じをもつようになる。……>というある文学者の言葉に、今回のクルーズ船の旅をとおして、深く納得することができた。

(13) 第13日目 プエルト・チャカブコへ、ひたすら終日クルージング

2月11日(火)

昨日の夕方、ベッドにもぐりこむ前にデッキを散歩した時には、世界は冷気を放ちながらも、明るく、ほがらかに澄みわたっていた。夜中に激しい風のうなり声を聞いた。しかし、パタゴニア特有の北西からくる風に向かって北上している船は揺れていなかった。さすがに、9万トン以上、およそ全長300メートル、幅38メートル以上ある大型クルーズ船である。今回は1千名以上の乗務員が60各国以上の国から乗りこんでそれぞれの業務についているという。

翌朝の窓の外には、昨日のどこもかしこも青々とした世界から一変した灰色

の海と雲に覆われた島影がかすかにぼ～っと見える世界があるばかりであった。

今、どこら辺を進んでいるのだろうか。朝食後の9時半ころ、ボード上の地図を見ると、船の位置は、それぞれおよそ緯度48度、経度76度とある。そして、現在、船は、たくさんの島に囲まれた細い水路を出て、太平洋上を北上していることが分かった。これからは、右手の東側海岸のフィヨルドに浮かぶ島々のみを眺めることになる。まだ、当分は、＜嵐の大地＞と呼ばれているパタゴニア地方の太平洋上を船は進んで行く。もう、北西から吹く風を守ってくれる島々がなくなり、まともに、太平洋から猛烈な風を受けることになる。現在の船の位置から推測して、夜中にあの風のうなり声を聞いた時が、まさに南部氷床と多島に囲まれたフィヨルド海を抜けて太平洋に出たときなのである。船が進んでいる近くには、＜ペナス湾—Golfo de Penas＞という比較的大きな湾がある。今日のような猛烈な風が吹く日は、小さな船舶なら逃げ込めそうである。そういうことが度々あったのだろう、＜ペナス湾＞つまり、＜苦しみの湾＞という名前が命名されていることから、推測されるではないか。

今、船がとおり過ぎた、少し南に下ったところ、フィヨルド地帯の多島海に浮かぶ島のひとつにウェリントン島がある。尊敬する冒険家であり医師の関野吉晴氏の著書＜人類5万キロの旅、グレートジャーニー、1) 嵐の大地パタゴニアからチチカカ湖へ＞に、このウェリング島についての記述がある。関野吉晴は、1993年12月に、チリの最南端にある島のひとつ、ナバリノ島を出発、マゼラン海峡をカヤックで渡り、パタゴニアの平原を自転車で、パタゴニア南部氷床のうち、200キロをやっとのおもいで風に逆らって徒歩で縦断した。そしてチリを縦に走るアウストラル街道を800キロという長い距離をたびたび、トラックが巻き起こす風にぐらっとしながらも自転車でひたすら北上した。その後、10年かけて、徒歩、自転車、カヤック、スキー、ソリなどで人類誕生の地、アフリカまで旅を続けるという偉業を達した。つまり、関野氏は新人類



が最後に到達した南米最南端から出発したのである。今回のクルージング船による、パタゴニア旅行を決めた理由のひとつに先記の著書がある。

先の＜ペナス湾＞の東側には、パタゴニア北部氷床、サン・バレンティン氷床が広がっている。その寒冷地帯のせいだろうか、ますます、北、或いは、西からの風が激しくなっている。右手にある半島を大きく迂回して、可憐な名前の＜アナ・ピンク湾—Bahía Ana Pink＞に船が進入した夜の8時半ころに、ようやく風が収まってきた。デッキに出て、新鮮で冷やかな空気を胸いっぱい吸いこんだ。最高に気持ちがよかった。(つづく)

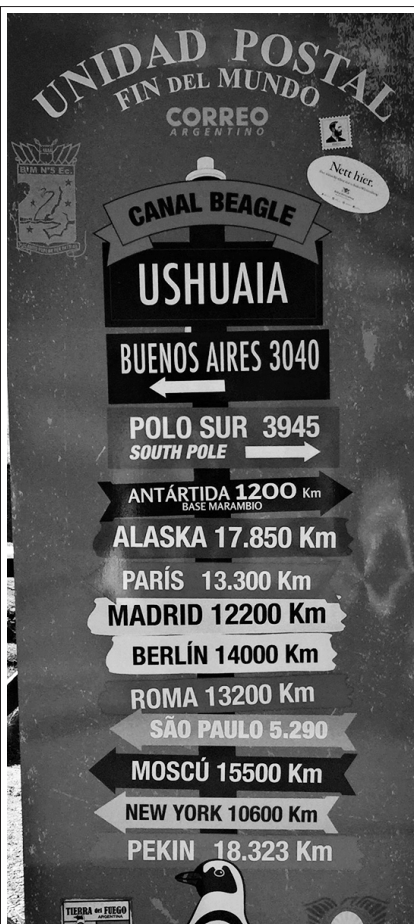
## 参考文献

- モーターサイクル南米旅行日記。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。  
2004 年。
- 第 2 回 AMERICA 放浪日記 ふたたび旅へ。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。  
東京。2004 年。
- ゲバラ日記。チェ・ゲバラ。高橋正訳。角川文庫。東京。1999 年。
- ゲバラ。アラン・アマー。廣田明子訳。原書房。東京。2004 年。
- スペイン現代史。若松隆。岩波新書。東京。1992 年。
- 物語 スペインの歴史。岩根圀和。中公新書。東京。2002 年。
- 物語 メキシコの歴史。大垣貴志郎。中公新書。東京。2017 年。
- 物語 ラテン・アメリカの歴史。増田義郎。中公新書。東京。2017 年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987 年。
- パタゴニアに行く。野村哲也。中公新書。東京。2011 年。
- エリザベス、ELIZABETH。トム・マグレガー。新潮文庫。東京。1999 年。
- エリザベスとエセックス。リットン・ストレイチー。中公文庫。東京。1999 年。
- グレートジャーニー、人類 5 万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010 年。
- 地球の歩き方、アルゼンチン、チリ、パラグアイ、ウルグアイ。1018-19 年。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017 年。
- Viaje por Sudamérica*. Ernesto Che Guevara, Alberto Granado. Editorial Abril. La Habana (Cuba). 1992.
- Inés del alma mía*. Isabel Allende. Penguin Random House Grupo Editorial. Barcelona, España. 2005.
- Cartas de la conquista de México*. Hernán Cortés. SAEPE. Madrid España. 1985.



南米大陸、世界最南端のフエゴ島を走る列車「最果て号」駅、ウシュアリア、アルゼンチン (上) プエルトマドリンからスタンリー島、ホーン岬、ウシュアリア (バタゴニア、アルゼンチン) からマゼラン海峡およびチリフィヨルドとパタゴニア海峡を通過してプンタアレナス、チリへのルート地図 (下)





南米大陸、世界最果ての郵便局内のチェ  
の写真、ウシュアイア、アルゼンチン（上、  
左）ウシュアイアからブエノスアイレス  
まで 3040 キロ、南極大陸まで 1200 キロ、  
ビーグル水道前の案内板、アルゼンチン  
（上、右）

ブルネス要塞内の資料を調査する筆者、  
サンタアナ岬、チリ（下、左）







十字架の丘、マゼラン海峡の最初のスペインの植民地跡、チリ（上、左）マゼラン像、  
プンタアレナス、チリ（上、右）マゼラン海峡発見、500周年、プンタアレナス、チリ（下）





## 2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasan. *z*.

### INTRODUCCIÓN

Intentamos aproximarnos a los conceptos básicos de la creencia budista y cristiana a través de la contrastación de textos relevantes. El budismo según la definición léxica se refiere a la doctrina filosófica y religiosa, derivada del brahmanismo, fundada en la India en el siglo VI a. C. por el Buda Gautama.

La rueda del Dharma es la traducción del Sánscrito de la palabra “Dharmacakra”. Los ocho rayos de la rueda representan los Ocho Nobles Caminos del Budismo (correcta visión, correcta aspiración, palabras correctas, conducta correcta, esfuerzo correcto, pensamientos correctos y concentración correcta).

Seguimos aquí el texto de la enseñanza de Buda de acuerdo a la versión de BUKKYO DENDO KYOKAI (Fundación Promotora del Budismo).

La Biblia (Del lat. biblia, y este del gr. βιβλία, libros). Sagrada Escritura, o sea los libros canónicos del Antiguo y Nuevo Testamento. Como su nombre indica, es el Libro por excelencia, o mejor, una “biblioteca o colección de libros”.

La Biblia es el único libro de la humanidad que tiene dos autores a la vez, uno divino y otro humano. Según la doctrina de la Iglesia el autor humano no es sino instrumento — vivo y libre — del Espíritu Santo, en tal forma que el hagiógrafo escribe y redacta bajo la inspiración del Espíritu Santo. Para los textos utilizados ver la bibliografía citada al final. También incluimos unas anotaciones complementarias en este mismo número de la Revista (Fukuoka University Review of Literature & Humanities).

(Todas las negritas y subrayados son del autor).



## **I -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"- (DH)**

1. El mundo está lleno de sufrimientos. El nacer es sufrimiento, la decrepitud, la enfermedad y la muerte son también sufrimientos. El encuentro con alguien por el que se siente rencor, la separación del ser amado, la búsqueda de algo inalcanzable, todo es sufrimiento. En otras palabras, la vida que no es libre de los apegos y deseos es siempre sufrimiento. A esto se le llama la Verdad del Sufrimiento.(\*)

(De: "La enseñanza de BUDA". DHARMA. CAPÍTULO PRIMERO: La causalidad. BUKKYO DENDO KYOKAI, 2006.)

## **1. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*"Jesús responde: -La bendición actúa y dura si los corazones permanecen fieles a la Ley de Dios y a mi doctrina; en caso contrario, la gracia cesa. Y es justo, porque, si es verdad que Dios da sol y aire tanto a los buenos como a los malos (para que vivan y, si son buenos, se hagan mejores, y, si son malos, se conviertan), también es justo que la protección del Padre se retire para castigo del malvado, para moverlo con penas a acordarse de Dios.*

*-¿No es siempre un mal el dolor?*

*-No, amigo. Es un mal desde el punto de vista humano, pero desde el punto de vista sobrehumano es un bien. Aumenta los méritos de los justos que lo sufren sin desesperación y rebelión y que lo ofrendan, ofreciéndose a sí mismos con su resignación, como sacrificio de expiación por las propias faltas y por las culpas del mundo; y es también redención para los no justos. -¡Es tan difícil sufrir!... - dice el campesino, al cual se han unido los familiares (unos diez entre adultos y niños). -Sé que el hombre lo encuentra difícil. Y el Padre, sabiendo esto, al principio no había dado el dolor a sus hijos. El dolor vino por la culpa. Pero, ¿cuánto dura el dolor en la Tierra, en la vida de un hombre? Poco tiempo, siempre poco aunque durase toda la vida. Ahora bien, Yo digo: ¿No es mejor sufrir durante poco tiempo que siempre?, ¿no es mejor sufrir aquí que en el Purgatorio? Pensad que el tiempo allí se multiplica por mil. ¡Oh!, en verdad os digo que no se debería maldecir sino bendecir el sufrimiento, y llamarlo "gracia", y llamarlo "piedad". 83. (MV)*

---

(\*) En el CAPÍTULO SEGUNDO: LA FIGURA REAL DEL ALMA HUMANA se expresa que "También es erróneo decir que todo es sufrimiento, como lo es el decir que todo es placer".

2

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

La causa de este sufrimiento humano nace, sin lugar a dudas, de los deseos mundanos que persiguen al alma. Si buscamos la fuente de estos deseos vemos que ellos están arraigados en un fuerte instinto físico que tenemos desde el nacimiento. Estos deseos basados en un intenso apego por la vida, ambicionan todo lo que ven y oyen, y hasta llegan a ansiar, a veces, la muerte. A esto se le llama la Verdad de la causa del Sufrimiento. Si destruimos las raíces de estos deseos y nos libramos de todos los apegos terminarán los sufrimientos del hombre. A esto se le llama la Verdad de la terminación del Sufrimiento.

2.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“He aquí pues que el árbol prohibido vino a ser, para la raza, realmente mortal, porque de sus ramos pendía el fruto del amargo saber que venía de Satanás; y la mujer vino a ser hembra, y, con la levadura del conocimiento satánico en el corazón, fue a Adán a corromperlo. Humillada así la carne, corrompida la parte moral, degradado el espíritu, conocieron el dolor y la muerte: del espíritu privado de la Gracia; de la carne privada de la inmortalidad. Y la herida de Eva engendró el sufrimiento, que no se calmará hasta la extinción de la última pareja de la tierra.”*

*-17. La desobediencia de Eva y la obediencia de María.- (MV)*

*-“Hija mía, la cosa principal para que Yo entre en un alma y forme mi habitación en ella, es el desapego total de toda cosa. Sin esto, no sólo no puedo morar en ella, sino que ni siquiera alguna virtud puede tomar habitación en el alma. Después que el alma ha hecho salir todo de sí, entonces Yo entro en ella, y unido con la voluntad del alma fabricamos una casa; los cimientos de esta casa se basan en la humildad, y cuanto más profundos sean, tanto más altos y fuertes resultan los muros; estos muros serán fabricados con piedras de mortificación, cubiertos de oro purísimo de caridad.” (...) En seguida se debe adornar esta casa y llenarla de tesoros, estos tesoros no deben ser otra cosa que deseos santos, lágrimas; estos eran los tesoros del antiguo testamento y en ellos encontraron su salvación, en el cumplimiento de sus votos su consolación, la fuerza en los sufrimientos, en suma, toda su fortuna la basaban en el deseo del futuro Redentor y en este deseo obraban como atletas. El alma sin deseo obra casi como muerta, aun las mismas virtudes, todo es tedio, fastidio, animadversión, ninguna cosa le agrada, camina casi arrastrándose por el camino del bien. Todo lo contrario el alma que desea, ninguna cosa le causa peso, todo es alegría, vuela, en las mismas penas encuentra sus gustos, y esto porque había un anticipado deseo, y las cosas que primero se desean, después vienen a amarse, y amándose, se encuentran los placeres más agradables”.*

*-Octubre 29, 1899 Jesús la lleva en brazos y la instruye.- (LP)*

## 3

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

Para entrar en este estado en el que ya no se tiene ni deseo ni sufrimiento, hay que hacer prácticas para seguir un cierto camino. Las etapas de este noble camino son: Visión correcta, Aspiraciones correctas; Palabras correctas; Conducta correcta; Vida correcta; Esfuerzo correcto; Conciencia correcta; Concentración correcta. A esto se la llama la Verdad de los Ocho Nobles Caminos para desarraigar los deseos

## 3.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

**163.** *La fe nos hace gustar de antemano el gozo y la luz de la visión beatífica, fin de nuestro caminar aquí abajo. Entonces veremos a Dios "cara a cara" (1 Cor 13,12), "tal cual es" (1 Jn 3,2). La fe es pues ya el comienzo de la vida eterna (...)* (De CIC)

**1024.** (...) *El cielo es el fin último y la realización de las aspiraciones más profundas del hombre, el estado supremo y definitivo de dicha.* (De CIC)

**102.** *A través de todas las palabras de la Sagrada Escritura, Dios dice sólo una palabra, su Verbo único, en quien él se dice en plenitud (Cf. Hb 1,1-3): (...)* (De CIC)

**804.** *Las virtudes humanas son actitudes firmes, disposiciones estables, perfecciones habituales del entendimiento y de la voluntad que regulan nuestros actos, ordenan nuestras pasiones y guían nuestra conducta según la razón y la fe.* (De CIC)

**1273.** (...) *El sello bautismal capacita y compromete a los cristianos a servir a Dios mediante una participación viva en la santa Liturgia de la Iglesia y a ejercer su sacerdocio bautismal por el testimonio de una vida santa y de una caridad eficaz (Cf. LG 10).* (De CIC)

**1428.** (...) *Este esfuerzo de conversión no es sólo una obra humana. Es el movimiento del "corazón contrito" (Sal 51,19), atraído y movido por la gracia (Cf. Jn 6,44; 12,32) a responder al amor misericordioso de Dios que nos ha amado primero (Cf. 1 Jn 4,10).* (De CIC)

**1794.** *La conciencia buena y pura es iluminada por la fe verdadera. Porque la caridad procede al mismo tiempo "de un corazón limpio, de una conciencia recta y de una fe sincera" (1 Tm 1,5; 3, 9; 2 Tm 1, 3; 1 P 3, 21; Hch 24, 16).* (De CIC)

**2726.** *En el combate de la oración, tenemos que hacer frente en nosotros mismos y en torno a nosotros a conceptos erróneos sobre la oración. Unos ven en ella una simple operación psicológica, otros un esfuerzo de concentración para llegar a un vacío mental. Otros la reducen a actitudes y palabras rituales.* (De CIC)

4

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

Los hombres deben guardar con celo estas Verdades porque el mundo está lleno de sufrimientos y el que pretenda librarse de ellos tiene que cortar las ataduras de los deseos. El estado libre de pasiones terrenales y de sufrimientos, se logra tan sólo por medio de la Iluminación y la Iluminación se alcanza tan sólo con el cumplimiento de los Ocho Nobles Caminos.

4.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-*"Hija mía, por cuanto más frecuentemente gires en mi Voluntad para repetir tus actos, tanto más grande se hace la circunferencia del globo de luz, y por cuanto más fuerza de luz posee, tanto más se pueden extender sus rayos que deben iluminar el reino del Fiat Eterno. Tus actos fundidos, perdidos en mi Querer, formarán el sol especial que debe iluminar un reino tan santo, este sol poseerá la fuerza creadora y conforme extienda sus rayos, así quedará la marca de su santidad, de la bondad, de la luz, de la belleza y de la semejanza divina. Quien se haga iluminar por su luz sentirá la fuerza de una nueva creación continua de alegría, de contentos y de bienes sin fin."* (...)

-*Octubre 9, 1926 El reino de la Voluntad de Dios será una nueva creación. Gusto de Jesús al oír hablar de su Voluntad.*- (LP)

-*459 El Verbo se encarnó para ser nuestro modelo de santidad: "Tomad sobre vosotros mi yugo, y aprended de mí..." (Mt 11, 29). "Yo soy el Camino, la Verdad y la Vida. Nadie va al Padre sino por mí" (Jn 14, 6). Y el Padre, en el monte de la transfiguración, ordena: "Escuchadle" (Mc 9, 7; Cf. Dt 6, 4-5). Él es, en efecto, el modelo de las bienaventuranzas y la norma de la ley nueva: "Amaos los unos a los otros como yo os he amado" (Jn 15, 12). Este amor tiene como consecuencia la ofrenda efectiva de sí mismo (Cf. Mc 8, 34). (De CIC)*

-*1229 Desde los tiempos apostólicos, para llegar a ser cristiano se sigue un camino y una iniciación que consta de varias etapas. Este camino puede ser recorrido rápida o lentamente. Y comprende siempre algunos elementos esenciales: el anuncio de la Palabra, la acogida del Evangelio que lleva a la conversión, la profesión de fe, el Bautismo, la efusión del Espíritu Santo, el acceso a la comunión eucarística. (De CIC)*

-*1696 El camino de Cristo "lleva a la vida", un camino contrario "lleva a la perdición" (Mt 7, 13; Cf. Dt 30, 15-20). La parábola evangélica de los dos caminos está siempre presente en la catequesis de la Iglesia. Significa la importancia de las decisiones morales para nuestra salvación. "Hay dos caminos, el uno de la vida, el otro de la muerte; pero entre los dos, una gran diferencia" (Didaché, 1, 1) (De CIC)*

## 5

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

2. Todo el que pretenda llegar a la Iluminación tiene que conocer estas Cuatro Nobles Verdades. El que no las conoce vagará por los caminos de la incertidumbre toda una eternidad. Al que las conoce se le llamará "El que ha conseguido los ojos de la Iluminación".

Por eso, tenemos que concentrar el alma en la meditación de las Enseñanzas de Buda y penetrar en el verdadero sentido de esas Cuatro Verdades Nobles. Un santo de cualquier época, si lo es en realidad, es uno que entiende bien estas Nobles Verdades y las predica a los hombres.

Cuando el hombre comprende claramente el verdadero sentido de estas Cuatro Nobles Verdades, entonces por primera vez desecha los deseos, deja de rivalizar, matar, robar, adulterar, engañar, maldecir, adular, envidiar, enfadarse, y, sin olvidar lo transitorio de la vida, no se desvía del camino correcto.

## 5.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-2052. "Maestro, ¿qué he de hacer yo de bueno para conseguir la vida eterna?" Al joven que le hace esta pregunta, Jesús responde primero invocando la necesidad de reconocer a Dios como "el único Bueno", como el Bien por excelencia y como la fuente de todo bien. Luego Jesús le declara: "Si quieres entrar en la vida, guarda los mandamientos". Y cita a su interlocutor los preceptos que se refieren al amor del prójimo: "No matarás, no cometerás adulterio, no robarás, no levantarás testimonio falso, honra a tu padre y a tu madre". Finalmente, Jesús resume estos mandamientos de una manera positiva: "Amarás a tu prójimo como a ti mismo" (Mt 19, 16-19). (CIC)

-“Hija buena, ánimo, levántate, no te abatas; ¿quieres saber cómo se forma la Luz de mi Divina Voluntad en tu alma? Los deseos repetidos son como tantos soplos que soplando sobre tu alma llaman la llama, las gotitas de Luz a encenderse dentro de ella, y por cuanto más intensamente deseas, tanto más sopla para alimentar la llama y engrandecerla de más, si cesa el soplo hay peligro que la llama se apague. Así que para formar y encender la llama se requieren los deseos verdaderos e incesantes, y para madurar y engrandecer la Luz se requiere el amor que contiene el germen de la Luz, en vano soplarías con tus deseos si faltara la materia inflamable sobre tus soplos repetidos. Pero ¿quién puede poner al seguro esta llama en modo de hacerla imperecedera, sin peligro de apagarse? Los actos hechos en mi Divina Voluntad, ellos toman la materia de encender la llama de nuestra Luz eterna que no está sujeta a apagarse, y la mantienen siempre viva y siempre creciente, y la voluntad humana ante esta Luz se eclipsa y se vuelve ciega, y viéndose ciega no siente más el derecho de actuar y da la paz a la pobre criatura. -Abril 2, 1931 Lo más precioso que tiene la criatura es la voluntad- (LP)

6

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

3. El que sigue por los Nobles Caminos es como el que entra en una habitación oscura con una antorcha en la mano. La oscuridad huye y todo se llena de claridad. El que estudia los caminos y llega a comprender el sentido de las Cuatro Nobles Verdades, tiene en la mano la Luz de la Sabiduría y ahuyenta con ella la oscura tiniebla. Buda se dirige a los hombres indicándoles estas Cuatro Nobles Verdades. El que los reciba correctamente podrá llegar a la Iluminación y ser el guía y guarda de los hombres en este mundo tan efímero. Al comprender el sentido de estas Cuatro Nobles Verdades desaparece la ignorancia que es el origen de todos los deseos. Buda dirige a los hombres indicándoles estas Cuatro Verdades Nobles. Todos los discípulos de Buda llegarán a comprender el sentido de las Enseñanzas, lograrán obtener la Sabiduría y la devoción para entender todos los principios y podrán predicar el Dharma a todos los hombres sin ninguna dificultad.

6.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

- "Y las religiones, desde la de Dios hasta la de la moral individual, dicen que la parte mejor de nosotros sobrevive, y que según como haya obrado en la tierra así será su suerte en la otra vida. Fin, pues, del hombre es la conquista de la paz en la otra vida; no las comilonas, la usura, el abuso de la fuerza, el placer, aquí, por poco tiempo, para pagarlos eternamente con muy duros tormentos. Pues bien, el hombre no sabe, o no recuerda, o no quiere recordar esta verdad. (...) ¿Habéis seguido hasta ahora un camino malo? ¿Abatidos, pensáis que es tarde para tomar el camino recto? ¿Desconsolados, decís: "¡No sabía nada de esto! Ahora me veo ignorante e inhábil"? No. No penséis que es como con las cosas materiales, y que hace falta mucho tiempo y fatiga para rehacer de nuevo, con santidad, lo ya hecho. La bondad del eterno, verdadero Señor Dios, es tal que, ciertamente, no os hace recorrer hacia atrás la vida vivida para colocarlos de nuevo en la bifurcación en que vosotros, errando, dejarais el recto sendero para seguir el malo; es tanta que, desde el momento en que decís: "Quiero ser de la Verdad", o sea, de Dios, porque Dios es Verdad, Dios, por un milagro enteramente espiritual, infunde en vosotros la Sabiduría, siendo así que ya no sois ignorantes sino poseedores de la ciencia sobrenatural, igual que los que desde años antes la poseen." 329. (MV)

- "Sabiduría es desear tener a Dios, amar a Dios, cultivar el espíritu, tender al Reino de Dios repudiando todo lo que es carne, mundo y Satanás. Sabiduría es obedecer a la ley de Dios, que es ley de caridad, de obediencia, de continencia, de honestidad. Sabiduría es amar a Dios con todo el propio ser, amar al prójimo como a nosotros mismos. Estos son los dos elementos indispensables para ser sabios con la Sabiduría de Dios." 329 En el mercado de Alejandrocena. (MV)

## 7

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-****LA CAUSALIDAD**

1. Así como todos los sufrimientos del hombre tienen sus causas y la Iluminación tiene su camino, todo nace y muere como resultado de causas y de condiciones. Llueve, sopla el viento, florecen las plantas, se marchitan las hojas: todo se debe a una causa. Nace el niño de los padres; los alimentos mantienen su cuerpo, así como las experiencias y los conocimientos nutren su alma.

Por ello, tanto el cuerpo como el espíritu, dependen de una serie de causas y condiciones en su formación y en sus cambios. Así como los agujeros de la red unidos van formando la red, todo es relativo y dependiente entre sí. Es erróneo pensar que un agujero de la red sea algo independiente y aislado. Él cobra valor dentro de su conjunto. Un agujero es un agujero en relación con otros agujeros. Cada agujero sirve para que otro sea un agujero.

## 7.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“Hija mía, todas las generaciones dependen de los primeros actos hechos por Adán en la plenitud de mi Divina Voluntad, porque siendo hechos en Ella, eran actos llenos de vida y podían dar principio y vida a todos los otros actos de todas las criaturas. Y a pesar de que las criaturas no viven de mi Voluntad, sino de la de ellas, pero es siempre Ella que les da vida, y mientras les da vida la tienen como sofocada y agonizante en sus actos. Por eso todos los actos de Adán hechos en mi Querer están como acto primero de todos los actos de las criaturas; ¿quién puede destruir un acto hecho en mi Divina Voluntad? ¿Quién puede quitarle la soberanía, la potencia, la belleza, la vida? Ninguno. No hay cosa que no dependa del primer acto, todas las cosas creadas dependen del primer acto hecho por Aquél que las ha creado. Y si tanto amo, suspiro y quiero que mi Voluntad sea conocida y reine en medio a las criaturas, es propiamente esta la razón, que sean restituidos sus justos y santos derechos, y que así como tuvo principio la Creación toda, así regrese toda en nuestra Divina Voluntad.” -Mayo 25, 1929 Potencia de quien vive en el Fiat Divino. Virtud de los actos hechos en Él. Todas las generaciones dependen de los actos hechos por Adán. (LP)

-340. La interdependencia de las criaturas es querida por Dios. El sol y la luna, el cedro y la florecilla, el águila y el gorrión: las innumerables diversidades y desigualdades significan que ninguna criatura se basta a sí misma, que no existen sino en dependencia unas de otras, para complementarse y servirse mutuamente. (De CIC)

8

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

2. Una flor florece porque se reúnen todas las condiciones para que florezca. Una hoja cae porque se reúnen las condiciones para que caiga. No florecen ni caen por sí solas. Ya que florecen y se marchitan por una serie de condiciones, todo lo que existe está sujeto a cambios. No existe nada que exista por sí solo ni que permanezca eternamente. Es un principio eterno e inmutable el que todo nazca y perezca debido a una serie de condiciones y causas. Por ello, la ley de la mutabilidad es un principio absoluto que nunca jamás cambiará.

8.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-213. Por tanto, la revelación del Nombre inefable "Yo soy el que soy" contiene la verdad que sólo Dios ES. En este mismo sentido, ya la traducción de los Setenta y, siguiéndola, la Tradición de la Iglesia han entendido el Nombre divino: Dios es la plenitud del Ser y de toda perfección, sin origen y sin fin. Mientras todas las criaturas han recibido de él todo su ser y su poseer. El solo es su ser mismo y es por sí mismo todo lo que es. (CIC)*

*-"Hija mía, mi Voluntad es incansable, queriendo mantener la vida, el orden, el equilibrio de todas las generaciones y del universo entero, no puede ni quiere cesar en su trabajo, mucho más que cada movimiento es como dado a luz por Ella y atado con vínculos inseparables. Imagen del aire que mientras ninguno lo ve, también da a luz el respiro en las criaturas, y es inseparable de la respiración humana, ¡oh! si el aire detuviera su trabajo de hacerse respirar, de un golpe cesaría la vida de todas las criaturas. Más que aire es mi Voluntad, el aire no es mas que un símbolo, imagen, y que produce la vida de la respiración por la virtud vital de mi Querer Divino, mientras que la mía es Vida en Sí misma e increada. -Noviembre 9, 1931 Dios tiene establecidos los actos de la criatura. (LP)*

*-"Hija mía, por lo tanto, la criatura sólo siente la verdadera vida en sí cuando entra en mi Divina Voluntad, porque en Ella la criatura ve con claridad su nada, y como esta nada siente la necesidad del Todo, es decir de Aquél que la trae de la nada para vivir, y como se reconoce, el Todo la llena de Sí". -Mayo 8, 1932 - (LP)*

*-"Porque, como el Padre tiene vida en sí mismo, así también le ha dado al Hijo tener vida en sí mismo, y le ha dado poder para juzgar, porque es Hijo del hombre."*  
(Juan 5, 26-27) (BJ)



## 9

## -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-

## III. DEPENDIENDO ENTRE SÍ

1. Entonces, ¿dónde está el origen de las tristezas, quejas, sufrimientos y angustias? El origen está en el apego obstinado a las cosas que tiene el hombre. Siente apego a las riquezas, al honor, a la vida, al "yo". De este apego nacen los sufrimientos. Desde sus comienzos el mundo está lleno de desgracias y tristezas, además de los tres sufrimientos inevitables de la vejez, enfermedad y muerte. Sin embargo si analizamos cuidadosamente estos hechos, vemos que existe el dolor porque existen los deseos. Con tan sólo desechar este sentimiento desaparecerán todos los sufrimientos.

## 9.

## HERMENÉUTICA CRISTIANA

-*"Hija mía, cuando el alma está desapegada de todo, en todas las cosas encuentra a Dios, lo encuentra en sí misma, lo encuentra fuera de sí misma, lo encuentra en las criaturas, así que puede decir que todas las cosas se convierten en Dios para el alma desapegada de todo, más aún, no sólo lo encuentra, sino lo mira, lo siente, lo abraza, y como en todo lo encuentra, así todas las cosas le suministran la ocasión de adorarlo, de implorarlo, de agradecerle, de estrecharse más íntimamente a Él, y además, tus lamentos por mi privación no son razonables, pues si tú me sientes en tu interior, es señal de que no sólo estoy fuera, sino también dentro, como en mi propio centro."* -Julio 28, 1904- (LP)

-*"He venido para ser Camino, Verdad y Vida. Os doy la Verdad con lo que enseño. Os aliso el Camino con mi sacrificio; os lo trazo e indico. Pero la Vida os la doy con mi Muerte. Y acordaos de que quien responde a mi llamada y se alista en mis filas para cooperar en la redención del mundo debe estar dispuesto a morir para dar a otros la Vida. Por tanto, quien quiera seguirme debe estar dispuesto a negarse a sí mismo, al viejo yo con sus pasiones, tendencias, costumbres, tradiciones, pensamientos, y seguirme con su nuevo yo. Tome cada cual su cruz como Yo la tomaré. La tome, aunque le parezca demasiado infamante. Deje que el peso de su cruz triture a su yo humano para liberar al yo espiritual, al cual no produce horror la cruz; antes al contrario, le es apoyo y objeto de veneración, porque el espíritu sabe y recuerda. Y que me siga con su cruz. ¿Que al final del camino le esperará la muerte ignominiosa como me espera a mí? No importa. No se aflija; antes al contrario, exulte por ello, porque la ignominia de la tierra se transformará en grande gloria en el Cielo, mientras que será un deshonor la vileza frente a los heroísmos espirituales".*- 346 Primer anuncio de la Pasión y reprensión a Simón Pedro.- (MV)

-*"Entonces dijo Jesús a sus discípulos: «Si alguno quiere venir en pos de mí, niéguese a sí mismo, tome su cruz y sígame. (Mateo 15, 24-26)*

10

**-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-**

Si ahondamos en estos deseos descubrimos que en el alma de los hombres existe la oscuridad de la ignorancia y un ansia insaciable. La oscuridad es la ignorancia de los principios que no permite ver la mutabilidad de la vida. El ansia insaciable nos hace desear algo inalcanzable. Por efecto de esta oscuridad y de esta ansia, el hombre discrimina cuando, en realidad, no existe la diferencia. Por efecto de esta oscuridad el hombre hace la distinción de lo bueno y lo malo, cuando, en realidad, esta distinción no existe en las cosas.

10.

**HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Hija de la Justicia es la verdad. Así como Yo soy Verdad eterna que no engaño ni me pueden engañar, así el alma que posee la justicia hace relucir en todas sus acciones la verdad; por lo tanto, conociendo por experiencia la verdadera luz de la verdad, si alguien quiere engañarla, al advertir la falta de la luz, que tiene en sí, pronto conoce el engaño, entonces sucede que con esta luz de la verdad no se engaña a sí misma, ni al prójimo, ni puede recibir engaño. Fruto que produce esta justicia y esta verdad es la simplicidad, otra cualidad de mi Ser, el ser simple, tanto, que penetro en todas partes, no hay cosa que pueda oponerse a que Yo penetre dentro, penetro en el Cielo y en los abismos, en el bien y en el mal, pero mi Ser simplísimo, penetrando aun en el mal no se ensucia, es más, ni siquiera recibe la más mínima sombra. Así el alma, con la justicia y con la verdad, recogiendo en sí este bello fruto de la simplicidad penetra en el Cielo, se introduce en los corazones para conducirlos a Mí, penetra en todo lo que es bien, y encontrándose con los pecadores para ver el mal que hacen, no queda manchada, porque siendo simple prontamente se libera sin recibir daño alguno. Es tan bella la simplicidad, que mi corazón queda herido a una sola mirada de un alma simple, y ella es causa de admiración a los ángeles y a los hombres.”- Agosto 10, 1899. (LP)*

*-“La voluntad, también en la criatura, es el depósito de todos sus pensamientos, del bien y del mal que hace, ella es depositaria de todo, nada se le escapa que no deposite en ella. Ahora, mi Humanidad tenía dos voluntades, la humana y la Divina, y todo lo que Yo hacía lo depositaba en la Divina, para poder encontrar no sólo los actos hechos por la Suprema Voluntad y corresponderla, sino para poder hacer otros nuevos actos de Voluntad Divina, para poder formar en Ella, de todo el obrar de mi Humanidad, una nueva creación, dejándola en depósito en Ella, a fin de que mantuviera esos actos íntegros, siempre nuevos y bellos, sin crecer ni decrecer, pues no están sujetos, por cuanto tomen de ellos, a sufrir la más mínima disminución”. -Marzo 8, 1925- (LP)*

## 11

## -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-

Los hombres sienten surgir en sí los pensamientos erróneos y por su necesidad no pueden ver claramente. Por el apego al "Yo" se conducen equivocadamente y, por consecuencia, vagan en el mar de la ignorancia. Hacen de sus acciones el huerto de su "Yo" en donde siembran los frutos de la discriminación de la mente. Cubren esta simiente con la tierra de la ignorancia, riegan con el agua del deseo y la fertilizan con su propio egoísmo.

## 11.

## HERMENÉUTICA CRISTIANA

-*"Así el alma que hace mi Voluntad puede decir: 'Mi vida ha terminado, no más mis obras saldrán de mí, **mis pensamientos**, mis palabras, sino las obras, los **pensamientos**, las palabras de Aquél cuya Voluntad es mi vida.'* Así que Yo digo a quien hace mi Querer: 'Tú eres vida mía, sangre mía, huesos míos.' Entonces sucede la verdadera, real, Sacramental transformación, no en virtud de las palabras del sacerdote, sino en virtud de mi Voluntad. En cuanto el alma se decide a vivir en mi Querer, mi Voluntad me crea a Mí mismo en el alma, y a medida que mi Querer corre en la voluntad, en las obras, en los pasos del alma, tantas creaciones mías recibe". -Agosto 20, 1913- (LP)

-*"Hija mía, cuando el alma vive del todo en mi Voluntad, si piensa, **sus pensamientos se reflejan en mi mente en el Cielo**, si desea, si habla, si ama, todo se refleja en Mí y todo lo que Yo hago se refleja en ella. Sucede como cuando el sol se refleja en un espejo se ve en éste otro sol, todo semejante al sol del cielo, pero con la diferencia que el sol en el cielo está fijo y está siempre en su lugar, en cambio en el espejo es pasajero. Mi Voluntad hace al alma como un espejo, y todo su obrar se refleja en Mí y Yo, herido, raptado por estos reflejos le envío toda mi luz, de modo de formar en ella otro sol. Así que parece un sol en el cielo y otro sol en la tierra. ¡Qué encanto, qué armonía entre ellos! Enero 30, 1916- (LP)*

-*"Hija mía, por cuanto más te fundes en Mí, tanto más Yo me fundo en ti, así que el alma, su paraíso se lo forma en la tierra según se ha llenado de **pensamientos santos**, de afectos, de deseos, de palabras, de obras, de pasos santos, así va formando su paraíso. A un pensamiento santo de más, a una palabra, corresponderá un contento de más y tantas variedades de belleza, de contenidos y de gloria por cuanto bien de más habrá hecho. ¿Y cuál no será la sorpresa del alma cuando rota la cárcel del cuerpo se encuentre en el océano de tantos placeres, felicidad, luz, belleza, por cuanto de bien hizo, aunque haya sido un solo pensamiento?" -Noviembre 15, 1916 - (LP)*

12

-LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-

2. En pocas palabras, el origen de este mundo de tristeza, melancolía, sufrimiento y angustia es el alma misma. El mundo de la ignorancia no es más que la sombra del alma y el mundo de la Iluminación también nace de esta alma.

12.

HERMENÉUTICA CRISTIANA

-2516 En el hombre, porque es un ser compuesto de espíritu y cuerpo, existe cierta tensión, y se desarrolla una lucha de tendencias entre el "espíritu" y la "carne". Pero, en realidad, esta lucha pertenece a la herencia del pecado. Es una consecuencia de él, y, al mismo tiempo, confirma su existencia. Forma parte de la experiencia cotidiana del combate espiritual: Para el apóstol no se trata de discriminar o condenar el cuerpo, que con el alma espiritual constituye la naturaleza del hombre y su subjetividad personal, sino que trata de las obras —mejor dicho, de las disposiciones estables—, virtudes y vicios, moralmente buenas o malas, que son fruto de sumisión (en el primer caso) o bien de resistencia (en el segundo caso) a la acción salvífica del Espíritu Santo. (De CIC)

-“Hija mía, cuando doy al alma lo amargo, las tribulaciones, si el alma se uniforma a mi Voluntad, si me agradece por ello, y de eso me hace un presente ofreciéndomelo a Mí mismo, para ella es amargo y sufrimiento, y para Mí se cambia en dulzura y alivio, pero lo que más me alegra y me da placer, es ver si el alma cuando obra y padece está atenta a agradarme solamente a Mí, sin otro fin o propósito de recompensa, sin embargo lo que hace más querida al alma, más bella, más amable, más íntima en el Ser Divino es la perseverancia en este modo de comportarse, volviéndola inmutable junto con el inmutable Dios, porque si hoy hace y mañana no, si una vez tiene un fin y otra vez otro, hoy trata de agradar a Dios, mañana a las criaturas, es imagen de quien hoy es reina y mañana es vilísima sierva, hoy se alimenta de exquisitos alimentos y mañana de porquerías.” -Junio 16, 1903 - (LP)

-“El alma que hace mi Voluntad y vive en Ella, puedo decir que es mi carroza y Yo tengo las riendas de todo; tengo las riendas de la mente, de los afectos, de los deseos, y ni siquiera una dejo en su poder, y sentándome sobre su corazón para estar más cómodo, mi dominio es completo y hago lo que quiero, ahora hago correr la carroza, ahora la hago volar, ahora me lleva al Cielo, ahora recorro toda la tierra, ahora me detengo, ¡oh, cómo soy glorioso, victorioso y domino e impero! Si después el alma no hace mi Voluntad y vive del querer humano, la carroza se deshace, me quita las riendas y Yo quedo sin dominio, como un pobre rey expulsado de su reino, y el enemigo toma mi puesto y las riendas quedan en poder de las propias pasiones.” - Septiembre 28, 1917 - (LP)

## 13

## -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-

3. En este mundo hay tres puntos de vista erróneos. Si ahondamos en estos puntos, habrán que ser negadas todas las cosas del mundo. Primero, unos dicen que todo lo que experimenta el hombre en el mundo lo controla el destino. Segundo, otros dicen que todo es por la voluntad de dios. Tercero, otros dicen que todo ocurre por casualidad. Si suponemos que todo está ya decidido por el destino, hacer el bien o hacer el mal estaría predestinado, la felicidad y la infelicidad también estarían predestinadas. Así todo en este mundo estaría predestinado. Por consecuencia, los hombres. no tendrían esperanzas ni harían esfuerzos para actuar debidamente. No habría en este mundo ni progreso ni mejora.

Las últimas dos teorías también recibirán la misma censura porque si toda decisión última se encuentra en las manos de dios o de un ciego azar, el esfuerzo de desechar el mal para hacer el bien perderá todo sentido. Por ello estos tres conceptos son erróneos. Todo nace mediante una causa y una condición, todo cambia y desaparece por una causa y una condición.

## 13.

## HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Nunca la predestinación se halla desligada del heroísmo. Los santos son héroes. De esta o de la otra forma, pero su vida es heroica de la manera que Dios se la propone. Ellos saben lo que hacen y a qué les lleva el hacer lo que hacen, mas no se asustan por ello. Saben también que lo que hacen sirve para continuar la Pasión de Cristo, acrecentar los tesoros de la Comunión de los Santos, salvar al mundo de los castigos de Dios y arrebatar al infierno tantos tibios y pecadores que, sin su inmólación, no se salvarían de la condenación. (...) Porque una es la predestinación de la Gracia divina, común a todos los hombres y concedida, por tanto, gratuitamente por Dios en medida suficientes para salvarse, y otra predestinación a la gloria que se da a quienes durante su vida terrena hicieron buen uso del don de la Gracia y permanecieron fieles a pesar de cuantas pruebas les tentaban al mal o de otros dones extraordinarios aceptados con emocionada alegría aunque no pretendidos ni destruidos por formarse con ellos una necia presunción de ser tan amados y estar tan seguros de poseer la gloria, que ya no tengan necesidad, en adelante, de luchar ni perseverar en el heroísmo para arribar a ella.” (MVL)

-“La predestinación a la gloria no es un don gratuito que se concede a todos los hombres, sino más que un don, una conquista llevada a cabo por los que perseveran en la justicia, una conquista que se consigue con el uso perfecto de los dones y auxilios de Dios y con la buena voluntad que jamás deja inactiva cosa alguna que le proponga o le entregue Dios, antes todo hácelo activo y lo dirige al fin santo e la visión intuitiva e Dios y a la posesión gozosa del mismo.” (...) (MVL)

## ALGUNAS CONCLUSIONES DEL PRIMER CAPÍTULO (Analogías y diferencias)

Según el texto budista para la eliminación del sufrimiento es necesaria la eliminación de todos los deseos pues son estos y el apego tanto a las cosas como al yo lo que obstaculiza el camino de la liberación, o sea, la iluminación. Así pues, parte del deseo de iluminación, de liberación y por tanto de la necesidad de eliminarlo junto a todos los otros deseos humanos. De esta manera el dharma budista comienza con el deseo tácito de la eliminación del sufrimiento aunque se admite que *“es erróneo decir que todo es sufrimiento, como lo es el decir que todo es placer”* (*La figura real del alma humana. Capítulo segundo, 7*)

La diferencia con el cristianismo es que en este no se parte de tal paradigma (todo deseo es la causa del sufrimiento) sino que proviene del pecado, esto es, específicamente del “deseo malo”. Tampoco se parte en la creencia cristiana del deseo de eliminar el sufrimiento sino de asumirlo como expiación. La iluminación cristiana estaría en la percepción del sufrimiento como un valor, en el saber sufrir, no en su eliminación porque obviamente no todos los deseos son negativos. Hay también una referencia en el budismo a la separación del ser amado como causa de sufrimiento, una concepción del amor en su concepto humano sin tener en consideración el amor que se da a Dios que es enteramente espiritual a diferencia del que se da a las criaturas.(1)

---

(1) –*“Hermano mío, hay muchos amores, y de distintas potencias. Está el amor de primera potencia: el que se da a Dios. Luego, el amor de segunda potencia: el materno, o paterno. Porque, si el primero es enteramente espiritual, éste es en dos partes*

Por otra parte en el cristianismo está el concepto de “pecado” considerado como todo pensamiento, palabra o acción que se considera que va contra la voluntad de Dios. El pecado está asociado así al mal.(2)

Como se ha indicado en el cristianismo el origen de todo sufrimiento no es cualquier deseo sino concretamente el deseo del mal, esto es, el pecado que es lo que se debe evitar, no así los otros deseos que pueden llevar al bien y a la santidad. El hecho de que en el budismo se asuma el pecado implica que en la conciencia del hombre se reconoce la ley divina.(3)

Shakyamuni (Buda Gotama) al haber sido dotado del don de una inteligencia superior que le permitió adentrarse en los misterios del alma

---

*espiritual y en una carnal se mezcla, sí, el sentimiento afectivo humano, pero predomina lo superior, porque un padre o una madre, sana y santamente tales, no dan sólo alimento y caricias a la carne de su hijo, sino que también nutren y aman su mente y su espíritu. Es tan cierto esto que estoy diciendo, que, quien se consagra a la infancia - aunque sólo fuere para instruirla - termina por amarla como si fuera su propia carne”. 196. (MV)*

(2) Dios dijo: “¿No es verdad que si haces el bien recibirás el bien y que si haces el mal el pecado se presentará inmediatamente ante tu puerta?”. En efecto, el bien lleva a una constante elevación espiritual y capacita cada vez más para cumplir un bien cada vez mayor, hasta alcanzar la perfección y hacerse santos; por el contrario, basta ceder al mal para degradarse y alejarse de la perfección, y conocer la servidumbre del pecado que entra en el corazón y hace descender a éste, por grados, a una sucesiva y cada vez mayor culpabilidad”. 606. (MV)

(3) 1778 “La conciencia moral es un juicio de la razón por el que la persona humana reconoce la cualidad moral de un acto concreto que piensa hacer, está haciendo o ha hecho. En todo lo que dice y hace, el hombre está obligado a seguir fielmente lo que sabe que es justo y recto. (...)”

En el “Dharma” hay varias referencias al concepto de “pecado”, entre otros:

- “Estos fuegos de los deseos no sólo queman a uno mismo, sino también a los demás y los conducen a cometer pecados de cuerpo, palabra y pensamiento.” (...)

- “El pecado de codicia no mancha mucho pero es muy difícil librarse de él. El pecado de ira causa una mancha grande pero es fácil librarse de él. El pecado de necedad mancha mucho y es muy difícil librarse de él.”

humana, no parece emplear tal don en ver la potencia de Dios y su existencia escrito en todas las cosas creadas y mostrarse agradecido ante la Mente suprema. Como filósofo argumenta a partir de las causas propias de las cosas en vez de razonar al menos intuitivamente de la causa primera: Dios. En cambio, parece querer ignorar lo eterno. Descubre fuerzas secretas del ser humano pero parece ser indiferente a la Fuerza de Dios.

En el cristianismo es más importante ser estrella en el Reino de Dios por pura fe que astro nebuloso en la tierra por puro esfuerzo personal y razonamiento humano. La iluminación cristiana quiere decir reconocerse hijo de la Luz, o sea, de Cristo el “Mesías” y vivir en la iluminación cristiana es cumplir su doctrina de amor que es lo mismo que decir vivir en la voluntad divina, en su Gracia. Cristo es el Salvador de la Humanidad y sin su redención no podría existir la esperanza de ningún paraíso. Cualquier paraíso que el ser humano intuya es un anhelo, un reflejo del verdadero. La creencia budista en este sentido se crea su propio paraíso que tiende instintivamente a la Luz a pesar de estar en el error de un culto idólatra. Tiende instintivamente a la Verdad, tiende al Bien pero como simple esfuerzo humano materializa lo que es altamente espiritual.

Otra diferencia la encontramos en la negación del “yo”: en el Dharma budista se niega la existencia del “yo”, en cambio, en el cristianismo no se niega la existencia de un “yo”. Negar el yo quiere decir reconocerlo.

En el camino cristiano se aprende a sufrir para despojar de toda la humanidad posible nuestra alma que es la que obstaculiza nuestra evolución de criatura muy humana a criatura espiritual. La caridad nunca va separada del sufrimiento santo. Ofrecemos el sufrimiento por el encuentro con la Luz



de la Palabra revelada para que ilumine a los espíritus anhelantes de Fe. El sufrimiento no es sin un fin, no es un sufrimiento inútil y el sufrimiento sobre la tierra (en enfermedad o en otro tipo) sirve para disminuir nuestro expiar futuro. Cuando uno llega a considerar que sólo la oración y la Palabra revelada calman el sufrimiento puede considerarse una etapa elevada en la unión con Dios. (11 octubre Cuadernos. M. Valtorta. 1943)

Teniendo en cuenta que desde la perspectiva cristiana son felices los que en todas las cosas saben ver a Dios, la felicidad budista al ignorar al Creador no puede ser una felicidad perfecta.

Hay un paralelismo no obstante en ambas creencias en considerar el apego como un serio obstáculo para la iluminación y liberación así como la de considerar que son necesarias ciertas etapas en el camino tal y como son: Visión correcta, Aspiraciones correctas; Palabras correctas; Conducta correcta; Vida correcta; Esfuerzo correcto; Conciencia correcta; Concentración correcta. (Puntos 1 y 3)

Desde la perspectiva humano-budista “No existe nada que exista por sí solo ni que permanezca eternamente” (8,2) en cambio desde la creencia cristiana Jesucristo sí tiene vida en sí mismo porque *“como el Padre tiene vida en sí mismo, así también le ha dado al Hijo tener vida en sí mismo.* (Juan 5, 26-27)

*Si bien existe una interdependencia de las criaturas eso no quiere decir que exista una autogénesis por evolución.* Es tentadora la creencia de que el ser humano es resultado de una evolución así como que el Universo es el producto de un principio u origen formado por sí mismo según determinadas condiciones naturales (autogénesis). Las ciencias actuales nos dice con su teoría de la evolución biológica que en el mundo existen partículas

elementales que dan lugar a átomos, a moléculas que a su vez forman macromoléculas que forman células. Estas células a través de organismos pluricelulares cada vez más complejos son las que darían por evolución el ser humano. Esta teoría nos lleva casi a la conclusión de que es la célula la que se autoformó de la nada y la pregunta obvia es que dónde están los elementos que la formaron para lograr vivir y reproducirse. No se comprende que de una célula hayan podido derivarse tantas especies diversas.

Se oculta en este paradigma un pensamiento soberbio que niega lo que es la Verdad de la Revelación y que intencionalmente quiere ignorar cualquier dios para carecer de todo tipo de freno moral o natural. En realidad se necesita un esfuerzo mayor de la razón para comprender esta tesis evolucionista que la explicación sencilla dada por el Génesis de la Creación por un Creador y esto por la sencilla razón de que la Biblia no es una simple hipótesis científica como la del origen del Cosmos por una gran explosión, que llevaría a la persona al ateísmo. Este mundo no ha surgido de la nada por autogénesis sino que Dios lo ha creado de la nada.(4)

Como en todas las creencias religiosas puede admitirse una actitud budista o cristiana de buena o mala voluntad en la que se asumiría en la primera la experiencia de la iluminación como una voluntad de percibir la

---

(4) Sobre la teoría evolutiva y la creación desde una perspectiva cristiana puede consultarse:

- CASADESÚS CASTRO, Ricard. *“Creación y evolución. Fundamentos para una filosofía de la creación evolutiva”*. Tesis doctoral. Universitat Ramon Llull. Dirigida por Dr. Manuel García Doncel, S. J. Barcelona. [www.url.edu](http://www.url.edu)

- CROMBETTE, Fernand. *“El Génesis, ese incomprendido”*. (Un tesoro escondido en la Revelación) Círculo Científico e Histórico. Tournai, (Bélica) CESHE a.s.s.l., 1989, y *“El origen del hombre según el Génesis”* (Bélica) CESHE a.s.s.l.

unión con la divinidad en la semejanza del alma con Dios. En el segundo caso la búsqueda de iluminación podría degenerar en una exaltación de la propia mente, una especie de autoidolatría.

Buda Gautama para llegar a la eliminación del sufrimiento y obtener la iluminación nos propone que toda persona debe seguir el Camino del Dharma practicando el Noble Octuple Sendero, un camino que evita los extremos (**Camino-Medio**) según descubrió a través de diversas prácticas y como esfuerzo de un ser humano que intenta liberarse del sufrimiento.

En cambio, Jesucristo en el camino que nos propone se identifica hasta el punto de decir que Él mismo es el Camino, la Verdad y la Vida (Juan 14:6). Así pues si tuviésemos que definir el camino cristiano tendría que ser el **Camino-Centro** en el que la Voluntad divina es el centro y las virtudes son la circunferencia. La Voluntad divina es el Centro y toda la Creación recibe vida de este Centro. Por lo tanto la persona que vive del querer divino debe ser como centro de todo.

Este **Camino del Centro** guiado por la Voluntad divina contiene perfecto equilibrio que lleva el orden y en el que todas las cosas armonizan juntas como si fueran una sola. El orden lleva la igualdad, la igualdad lleva la semejanza (un reflejo de la armonía, orden y semejanza en las Tres Divinas Personas. -Agosto 6, 1922. (LP)-

Como última reflexión las palabras de Jesús en su Evangelio:

*“Vosotros quizás decís: “Pero entonces, ¿qué justicia hay en el hecho de ser de la religión verdadera, si al final del mundo vamos a ser tratados de la misma manera que los gentiles?”. Os respondo: la misma justicia que hay -y*

*es justicia verdadera- para aquellos que aun siendo de la religión santa no serán bienaventurados por no haber vivido como santos. Un pagano virtuoso, por el solo hecho de haber vivido con virtud escogida, convencido de que su religión era buena, tendrá al final el Cielo. ¿Pero cuándo? Cuando llegue el fin del mundo, cuando de las cuatro moradas de los que han muerto queden sólo dos: el Paraíso y el Infierno. Porque la Justicia en ese momento deberá conservar y dar estos dos reinos eternos, respectivamente a quien del árbol del libre albedrío escogió los frutos buenos y a quien quiso los malos. (MV) — 444 —*

(Continúa)

## BIBLIOGRAFÍA (\*)

**BJ. La Santa Biblia de Jerusalén, 1976.**

**CIC: Catecismo de la Iglesia Católica.**

[file:///C:/Users/villa/Desktop/catecismo\\_iglesia\\_catolica.pdf](file:///C:/Users/villa/Desktop/catecismo_iglesia_catolica.pdf)

**DH. Dharma. La enseñanza de Buda. Capítulo primero. La causalidad. Bukkyo Dendo Kyokai, 2006.**

<file:///C:/Users/villa/Desktop/BUDISMO/4%20nobles%20verdades.pdf>

**DHH. Dios habla hoy. Sociedad Bíblica Americana. III Conferencia General del Episcopado Latinoamericano. Puebla- México. 1979.**

**LP: Luisa Piccarreta. Libro de Cielo.**

<file:///C:/Users/villa/Desktop/DIVINA%20VOLUNTADLIBRO%20DE%20CIELO.Obispos.pdf>

**MVL. Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia,**

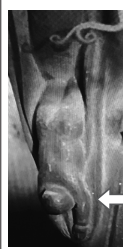
*Traductor: Santiago Simón Orta. (Libro electrónico.)*

**MV. Valtorta, Maria El Evangelio como me ha sido revelado. (Libro electrónico)**

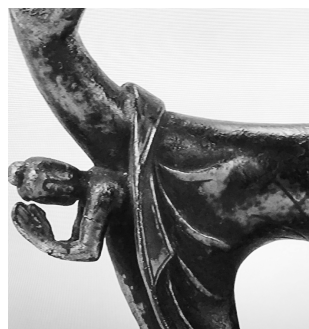
[file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/primer\\_vida\\_publica.pdf](file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/primer_vida_publica.pdf)

(\*) El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo. En cuanto a las ideas expuestas expreso mi adhesión a la doctrina del magisterio de la Iglesia Católica en cuestiones relativas a la fe cristiana. Negritas y subrayados del autor.

DETALLE



(Kioto)



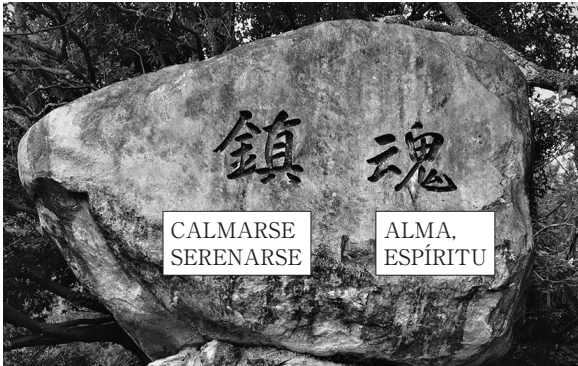
NACIMIENTO DE SAKYAMUNI

REPRESENTACIÓN DEL NACIMIENTO DE SAKYAMUNI (Buda Gautama)  
EN TEMPLOS BUDISTAS.

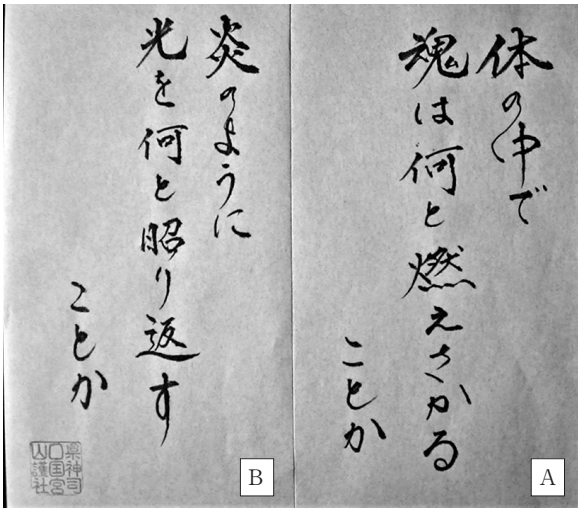


REPRESENTACIÓN DEL NACIMIENTO DE JESUCRISTO EN IGLESIAS  
CRISTIANAS (ITALIA)

ILUSTRACIONES (DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO)



INSCRIPCIÓN  
GRABADA EN  
UNA ROCA EN EL  
TEMPLO BUDISTA  
DE EIFUKUJI EN  
LA ISLA DE  
NOSKONOSHIMA  
(FUKUOKA,  
JAPÓN)



A:  
¡Cómo arde sin  
preocupación el  
alma en el templo  
de su cuerpo!

B:  
¡Qué  
(delicadamente)  
refleja la Luz  
como pura llama  
de fuego!

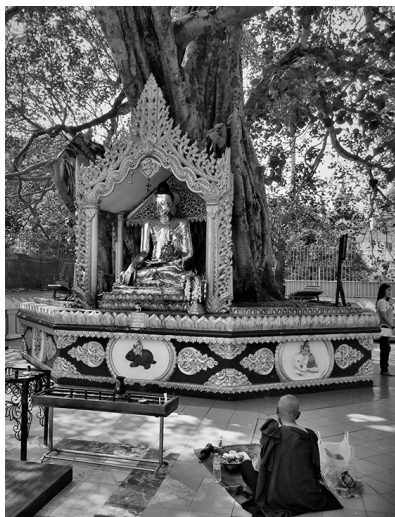
(Aproximación a  
una expresión de  
la armonía entre  
el alma y la divina  
Voluntad)

*“Mi Voluntad hace al alma como un espejo, y todo su obrar se refleja en Mí y Yo, herido, raptado por estos reflejos le envió toda mi luz, de modo de formar en ella otro sol. Así que parece un sol en el cielo y otro sol en la tierra. ¡Qué encanto, qué armonía entre ellos! ¿Cuántos bienes no se derraman en favor de todos!”...*

- Libro de Cielo- Enero 30, 1916- (LP)

ILUSTRACIONES (DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO)

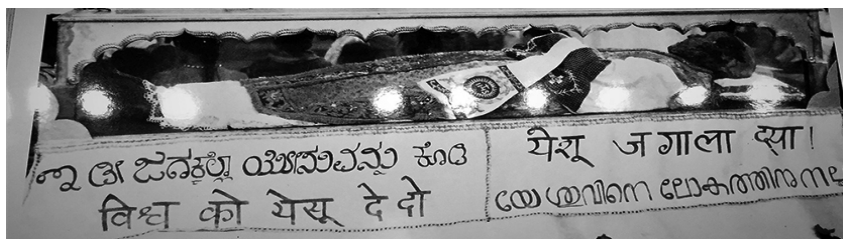




ACTITUD BUDISTA



ACTITUD CRISTIANA



### 腐敗しないザビエルの遺体

インドのボン・ジェス教会に奇跡的に腐敗しないまま  
ザビエルの遺体が保管されている。

**The incorrupt body of St. Francis Xavier**  
The body of Xavier is kept in the Bom Jesu Church in Goa,  
and it is venerated by people of all religions alike.

ILUSTRACIONES (DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO)